

ご落胤王子は異世界を楽しむと決めた！

るう



ファンタジア文庫

2794

目次

プロローグ	5
第一章 試行錯誤 <small>（きこうご）</small>	10
第二章 王都へ	79
第三章 学校へいこう	158
第四章 学園生活	240
エピローグ	336
あとがき	340

プロローグ

春の爽やかな朝、家族と朝食をとっていた。

給仕の配膳したスープを、いつものように口にして「あ」と小さく呟く。

毒、だ。

またか、というどこか諦めに似た昏い感情と共に椅子から転がり落ちていた。上座に座る父親が、慌てて駆け寄り水を持ってくるように指示している。

二才年上の次兄と、二つ下の妹が取り巻くようにオロオロと泣きそうな顔をしていた。

母は、気を失いかねない顔色で僕を心配そうに見ている。

うらかな食卓は、こうして上を下への大騒ぎになってしまった。

給仕をした実行犯の男は、部屋の外へと出ようとしていたところを捕まったらしい。ほとんど一瞬で意識を失ってしまったので、これら騒ぎは後で聞いたことだった。

僕は、王都から離れた田舎の領地を持つ伯爵家の三男、リュシアン・オービニユ。先日、八才の誕生パーティを、小規模ながら屋敷で開いたばかりである。

少し病気がちのせいかな身体も小さく、年よりもかなり幼く見えるのが悩みの種だった。薄い色合いの金髪は直毛で、父親の碧色の瞳も少し灰色がかった色だ。

僕には、二人の兄と、一人の妹がいた。

今年十六才になる上の兄は、隣国の有名な学園都市に留学していて今は屋敷にいない。二つ違いの兄は、どちらかというと勉強は苦手だが、剣術に長けており将来は騎士になりたいと言っていた。妹はまだ六才で、金色に近い栗色の柔らかい巻き毛に青い瞳の愛らしい顔立ちで、三人の兄によく懐いていた。

両親はとても優しく、かつ領主としても公平で清廉な人となりだった。家族には恵まれていると思う。

両親のことは尊敬しているし、兄妹は大好きだ。その点で不満など一つもない。けれど、なぜか小さいころから何度かこうして命を狙われているのだ。

伯爵家のそれも三男を、何故？

お家騒動など考えられなかった。家族の誰もが伯爵家を継ぐのは長男のファビオだと思っっているし、それを不満に思っている者は家臣たちをはじめないと思う。

今回のこれで、一体何度目だろうか？

他の兄妹が外へ出るときも、僕が一緒に行くと大げさなまでに護衛がつく。それが嫌で、

物心つく頃にはあまり外出もしなくなった。

そういう背景もあって、だんだん引つ込み思案な性格になっていった。両親や兄妹はそんな僕を心配してあれこれと気を遣うが、かえって意固地になってしまい、今となつては当たり障りなく、心配をかけないよう屋敷に閉じこもり気味になってしまったのだ。

そして、今日。

何度も命を狙われてきたが、今回ののは流石に危なかったらしい。

生死の境を数日間彷徨った。

脱水症状が続き、高熱と朦朧とする意識の下――。

僕は、変な夢を見ていた。

見たこともないような光が瞬く明るい夜。

石造りのとんでもない高さの建物が所狭しと建ち並ぶさまは、まるで押しつぶされてし

まうかのような圧迫感だ。

リュシアンとしての記憶がこれを知らないと判断し、もう一つの記憶がこれを懐かしいと感じていた。

――俺が生きてきた世界。

それは、前世の記憶のかけら。ひとつ、またひとつ、と微塵に散っていたピースが、寄り集まって僕の記憶に上乘せられていく。どこか他人ごとのようでもあり、それでも、それが自分の記憶なのだと思議と確信が持てた。

——ああ、懐かしい風景だ。

今度はストンと感想が落ちてきた。

あの場所を俺は知っている。かつて宮田斎として平凡に過ぎる人生を送って、そして終わった場所。

下手に仕事ができたらがゆえに会社にいいように使われた。

恋愛においてもいい人で終わってしまうところがあつた。

飄々として人を引き寄せる魅力があり、周りにはいつもそれなりに人がいたものの、特に親しい相手を作ることはなかった。家族に恵まれなかった幼少期の境遇が、根本的なところ

で人との距離を置いてしまつていたのかもしれない。

天涯孤独で、四十半ばになつても恋人の一人おらず、その記憶は、ある日突然途切れている。おそらく急な病に倒れ、一人暮らしたために、誰にも助けられず死んでしまつたのだらう。

この記憶は、おそらく前世のもの。

とくに変わった人生を送るでもなく、無為に失つた命の記憶。

だからこそ、と僕は思った。

今度は、訳もわからず死ぬのはごめんだと。

何としても生き延び、精いっぱい生きることを楽しんでやろう、と。

殺されてなどやらない。

それは誰に聞かせるでもない、見えない敵への宣戦布告。

幾度も暗殺の脅威に晒され、どこか諦めにも似た心境に陥っていた気持ちだが、ここへきて逆

に逆さまになってしまった。達観したというか、どうして狙われているかなんて知らないが、それこそ知つたことか、と思つた。

消極的で気弱なりュシアンである前に、俺は、生前飄々として人生を立ち回つたモーレ

ツ(笑) 社員のイツキでもあるのだ。

そうして三日三晩の昏睡の末、僕はようやく目覚めたのである。

第一章 試行錯誤さくご

「やはり……は、王都の……関係……らしい」

「まあ、では……もしかして、……の」

途切れがちな声が、部屋の隅から聞こえてくる。

「君の……からは、無理……か？」

「……様が、亡……の派……で……」

よく聞こえない。

両親の声だということは辛うじてわかった。

高い熱のせいで散漫になる意識の中、なんとなく彼らの話を聞いていた。すると、さわと意味をなさない話し声が、徐々に明瞭になっていく。

二人がベッドの方へと歩いてきたのだろう。

「どうして放っておいてくれないのかしら」

母の声が、掠れて涙ぐむ。

「泣くでない。辛いのはこの子なのだ。なんとか私たちで守ってやらねばな」

「もちろんですわ。たとえ王家にだつてリユクは渡しません」

王………？

一体、何の話をしているのだろうか。

はつきりいつて王都にも行ったことはないし、王族のことなど教科書の中のことだ。伯爵家の三男坊に、なんの用があるというのだ？

ここで腑に落ちた。

ああ、そうか。

熱に浮かされた頭が、すつと冷めていくのを感じた。

渡す、渡さないではない。排除したい、そういう話なのだ。

なんとなくわかってしまった。詳細など知らない、大人の事情という奴だろう。いずれは詳しく話してくれるかもしれないが、今はこれで十分だ。

おそらく僕……いや、僕の血を、邪魔だと思ふ奴がいるのだ。

驚きはあったものの、そのこと自体に大して動じることはなかった。なぜならそれ以上に衝撃的な事実がそこにはあったからだ。

彼らが……この優しい両親が、本当の親ではないかもしれないという事実だ。どんな秘密を明かされようと、おそらくそれ以上の驚きも、そして悲しみもなかっただろう。

俺は、また家族を失うのだろうか？

母の細い指が、僕の髪を優しく撫でている。

父は、おそらくそんな母の肩を抱いているだろう。

僕は、貴方たちの子供でいたい。

熱のせいではなく、殺される恐怖でもなく、その臉からは涙がこぼれ落ちた。

ゆっくりと目を開けると、覗き込むいくつもの顔があった。

「ああ、よかった。リユク、わかりますか？」

青い瞳が、優しくに微笑んだ。オービニユ伯爵の妻、アナスタジア。

決して華美ではないが、いつも笑顔を湛えた素朴で愛らしい女性だった。美しい金髪を結い上げているが、それでもかなり若く見える。

答えようと「母様」と呼ぼうとして、咽喉がつかえて思わずせき込んだ。

妹のマノンが、慌ててベッドサイドの水差しを母親に渡す。

「あ、俺は父上呼んでくる」

やり取りを見ていた次兄のロドルクは、はっとなって慌てて部屋を出て行った。

水差しの水で喉を潤すと、僕はようやく落ち着いて息をついた。身体を起こそうとした

が、母はそれを許さず、肩を軽く押し返して首を振った。

「まだ起きてはいけませんよ。気分は悪くありませんか？」

「にいさま、へいき？ もうだいじょうぶ？」

仕方がなくベッドに横になったまま母に領いた僕は、掛け布団に縋りつく妹の頭を撫でてやって「大丈夫だよ」と笑って答えていた。

ふと母が少し驚いたように瞬きして口を開きかけたが、すぐに父が部屋に入ってきたので意識はそちらへ移った。

「リユクは大丈夫か？ アニア、どうなのだ」

「きちんと診て頂かなくてはいけません、今のところは問題なさそうですわ」

「ご心配かけて申し訳ありませんでした、僕はもう平気です」

先ほどの母同様、僕のいつもとは違う様子に目を見張りはしたものの、父はすぐに一つ頷いて優しく笑いながら続けた。

「医者があるまで横になってなさい、しっかり診てもらおうのだぞ」

「はい、ありがとうございます」

こういう出来事の後には、いつもの僕なら、ひどく落ち込んでるところだが、今の気分はむしろ爽快なので、その通りの表情で父親に答えた。

いささか不思議そうな顔をしている両親に苦笑しつつも、この期に及んで、わざわざ態度を改める気などない。

元のリユシアンは、もちろん自分ではあるけれど、たぶん今の僕とまったく同じ人物ではない。ただ、昨日の夜のことは、まだ父母には言わないでおこうと思った。

聞いてしまったこと。

僕の出生が、王家に関係していること。

確信が持てなかったのも確かだが、本当はまだ信じたくなかったのかもしれない。この人たちの息子ではないと、はっきり断言されてしまうことが……。

ともかく、ただ腐ってばかりいた今までとは違う。

自分を守ってくれている両親の為にも、そして巻き込まれてしまうかもしれない兄妹の為にも。これは、もはや自分のことだけではないのだ。

僕にとつて、果てしなくどうでもいいことに、正直なところ巻き込まないでもらいたいが、たぶんそつとはしておいてくれないのだろう。

それなら力をつけるしかない。

——対抗する力を。

もちろん戦うことだけがすべての選択肢ではない。身を引くことで解決できるなら、国

を出てもいいとさえ思っている。

むしろ家族を守るためには、それが一番いいのかもしれない。

逃げるみたいで恰好が良いとはいえないが、どうしても放っておいてくれないのならもう仕方がないではないか。そのためにも力をつけて、一人で生きていけるようにしなくてはいけないのだ。

それにこちらの本意ではないが、もし戦うとなった場合でも、無為に泣き寝入りだけはしたくない。誰かの損得の為に、なぜ自分が不利益を被らねばならないのか。

今までのことは水に流してもいいが、これからも続けるといふのなら、こちらだつて黙ってやられっぱなしになる気などない。

まったく、これから忙しくなりそうだよ！

自分の生死がかかっているというのに、だんだん気分が高揚してくるのがわかった。

ブラック企業の元サラリーマンなめるなよ。年中無休、昼も夜もぶつ通しで働ける自信があるぜ。

まあ……たぶん、それで過労死したんだけども。

前世は過労で死んだ筈句、異世界に転生してみれば、今度は常に命を狙われるといういわく付き。まさに波乱万丈すぎる人生だが、ここまで来れば、もう楽しむしかないだろう

とさえ思った。

要は考えようかもしれない。

これはどうして、やりがいのある人生だ。なにより自分のためである。せつかく異世界にまで来たんだし、楽しむための努力ってやつだね。

父の書齋で、僕はさっそく途方に暮れていた。

「えー……リ、エシアンってば、文字読めなさすぎだろう」

適当に引き出した本を開いて、愕然となる。何が書いてあるかさっぱりなのだ。確かにまだ学校にも行ってないが、八才にもなって字が読めないって、なにそれ。

もつとも、僕の記憶として、勉学に熱心でなかったことは残念ながら覚えている。

「これは、正直まいった」

こちらの世界の学校は、貴族なら十才くらいで入学するという。これも強制ではないが、王立学校の教養科は大体の貴族の子女が通うらしい。その前にある程度の学力は、家庭教師による勉強で身に付けることになる。

さらに魔法や剣術など家の方針による個人技は、専門の教師をつけて学校に行く前に体裁を整えるくらいはやっておくのが普通だ。学校はあくまで人間関係や、貴族の子女とし

ての礼儀作法などを学ぶことを前提に通うのだ。騎士や、魔法を極める者などはさらに上の学校へ行ったり、専門の学校に行くことになるという。

僕にも、むろん家庭教師はいる。

ただ熱心ではなかったのだ。勉強嫌いだだったと言ってもいい。

「なんてこった、読み書きからか……」

さっそく父に頼んで、家庭教師の授業日数を増やしてもらった。そして次兄ロドルクの剣術の先生の授業に、一緒に参加させてほしいとお願いした。

この世界には、魔法もある。

僕の体つきでは、兄のように逞しく成長することはないだろうから、魔法はそれを補うのに最適だと思った。けれど、その件を父に聞いたら困ったような顔をされた。

この世界の子供は三才から五才くらいで魔力の適性を調べるらしいのだが、どうやら僕は適性なしと出たらしいのだ。

なんてこった。その辺り、全然覚えてないよ。

今ならわかる。おそらく認めたくなかったのだろう。だって、今ものすごくショックだからだ。過去の僕が、世を拗ねる要因の一つだったかもしれない。

ともかく、魔法の書物は書齋にあるから好きに読んでいいと言われた。それでこうして

来たのだが、ぜんぜん読めなかつたと、こういうわけだ。

「まずは、文字だよね」

げんなりして、部屋を出る。そろそろ家庭教師が来る時間だ。自分の部屋に行くと、先生はもう来ていた。

「すみません、遅れました。よろしくお願ひします」

「いいえ、今来たところです。授業を増やして欲しいとおっしゃられたそうで」

五才の頃から教えてもらっている先生である。みそ路を少し過ぎた頃の、ちよつとだけ厳しい目をした女性だ。細い銀縁メガネを、揃えた中指でクイツと持ち上げるのが癖である。彼女は、幼少期を担当する先生なので、特に科目ごとの専門ではなく、総合的な家庭教師という括りらしい。

もつとも最初の文字で躓いていたので、他の科目どころではなかった。それまでの勉強を反省し、きちんと文字を読めるようになりたいと言ったら、涙ながらにめっぽう感激された。

「ただ勉強嫌いだったんだ、リュシアン！」

やってみれば、どうして物覚えは悪い方ではないように思う。

もとより前世では勉強はできた方である。

とはいっても、天才というわけではなく努力したのだ。なにしろ、両親を早くに亡くして親戚の家を転々としたために、どこでも厄介者扱い。せめて勉強だけでも頑張ろうと健気なことを考えたわけだが、自分の子供よりできる他所の子というのは、それはそれで煙たがられる。でも出来なければ嫌味を言われるのだから理不尽極まりない。ともかく勉強は嫌いではないし、客観的に見て頭の出来も悪くなさそうだ。まるで乾いたスポンジが、水を吸収するように頭に入ってくる。

この分なら読み書きはすぐに覚えられるだろう。また、出来ることを褒められるというのは存外励みになるものだとも思った。なにしろ前世では一切褒められなかった。必要だからやった、それだけだったのだ。

「なにやら勉強を頑張っているらしいな、リュク」

食事の際に、父がそう言って褒めてくれた。

「まだ勉強というほどではないです。初歩の読み書き程度なので」

嬉しいけれど、恥ずかしいという何とも言えないむず痒い体験だった。照れ隠しに思わず謙遜すると、いやいやと首を振って「偉いぞ」と父は、自分のことのように嬉しそうに笑った。一緒になって母も賛同するものだから、いたたまれないくらいの気恥ずかしい思いをしたものだ。

なにしろ、ただ本が読めるようになった程度なのだ。

前世も合わせると五十にもなろうという年齢で、ここまでべた褒めにされると流石に穴でも掘って埋まりなくなる。下手をすると、お祝いでもしようという流れにもなりかねなかった。「それなら」と、代わりに授業の追加をおねだりした。

歴史や世界情勢なども知りたいし、もうちよつと専門的な先生にも教わりたいと頼んでみると、少し早いのでは？ と心配そうな顔をされたが、最終的には了解してくれた。

「そうだな、お前はなぜか計算は得意だし、そんなに勉強が好きなら、どんな先生でも呼んでやろう」

文字を教えてくれた先生が、そろそろ計算を覚えたほうがいいと言つて数学、というか算数を教えようとしてくれたのだが、正直こちらの計算は遅れているとしか言いようがなかった。難なく解いた僕に、先生が啞然としていたのは、まだ記憶に新しい。

手加減できるほどの問題ではなかった……。

すこし不思議がられたが、もうそこは仕方がない。それより一日も早く社会に出るために、この世界のことをもっと知りたい。遠慮している場合じゃないのだ。

「剣術の方はどうなんだ？」

一方、そんな父の問いには口をつぐんでしまった。少し笑いを堪えたような顔で、代わ

りに兄が答えてくれた。

「師匠が言うには、筋は決して悪くないみたいです。でも、体が小さいので剣に振り回されてしまうだろうって」

「ふむ、もともとあまり身体は丈夫ではなかったからな」

稽古は嫌いではないので続けてもらっているが、僕はどうやら剣で身を立てられそうもなかった。そうなると、やっぱり学問を進めるしかない。

あの毒殺未遂事件から約一ヶ月、いつの間にか大人に負けないくらい読み書きが達者になっていた。今なら父の部屋の書物は難なく読めるだろう。知識は有りすぎて困るということはないのだ。

書齋には、いくつか気になる書物があった。

まだ文字もろくに読めなかった頃から目をつけていた、それは図柄がたくさん描かれたものだった。そして前世でも、似たようなものを見たことがある。

これは、錬金術の本ではないだろうか？

文字が読めるようになり、それらの本を片っ端から読み漁った結果、ほぼ予想通りであったことがわかった。

この世界での初級錬金術は、ほぼ薬剤師と同義だった。

鉱石や金属は扱いが難しく材料の調達も大変である。それに比べて薬の作製は需要も多く熟練度を上げるのに適当なレシピも多いからだ。錬金には例外なく等級が付き、同じ傷薬でも特級と粗悪品とは天と地ほどの違いがある。

薬剤師になるなら高いはともかく、有意義な知識になることは間違いないかった。そして、もう一つ。

魔法学も、知識としては深めたいと思っていた。別に往生際が悪いとか、そういうことじゃなくて、知っていて損はないだろうと、そういう意味でね。

……本当だよ。

*

「あの事件からリユシアンは変わったな」

初夏の昼下がり、珍しく屋敷にいたオービニユ家の当主エヴァリストは、紅茶を片手に窓の外へ目を向けた。そこではまだ幼い兄弟が二人、剣を打ち合っていた。

「ええ、嘘のように活発になって、いろいろなことに積極的に取り組んでいるようですよ」彼らの年の差は二才だが、すでに体格はひと回り、身長は頭一つ半くらいの差がある。

小さな弟に、兄がうまく合わせているのか、剣の打ち合いはそこそこ形になっているよう

に見えた。

兄の方は、明るい金髪を短く刈り上げ、いかにも快活そうな精悍な顔立ちで、父親のエヴァリストによく似ていた。身体も大きく、剣を構える姿も様になっている。一方、弟の方は、さらさらの金色の髪が頸に掛かるほど長く、母アナスタジアによく似た繊細な顔立ちで、力もあまりないのか、練習用の木刀でさえ振り回されている。最近までは床に臥せることが多く、酷く華奢な体格で、同じ年頃の子供と比べてもかなり小さい。

やがて反復練習に入ったところで、エヴァリストはテーブルへと戻り、空のカップを置いて腰を掛けた。アナスタジアはポットを傾け、夫のカップを満たした。

「最近では錬金術に夢中のような」

「ええ、私の薬草園に入ってもいいかと尋ねてきたので、作業場も開放することにしました。どうかしら、先生も雇ってあげたほうがいいでしょうか？」

「そうだな、今はいろいろやってみたい時期なのだろう。だが、あまり詰め込みすぎて身体を壊すといけないし、しばらくはアニアのわかる範囲で教えてやればよからう」

オービニユ家の三男坊は、最近でこそ明るくなって部屋に閉じこめることもなくなっていたが、ついこの間までは季節が変わるたびに寝込んだりしていたのだ。急に張り切って倒れてしまわないかと心配になるのも無理はなかった。

「リユクは魔法が使えないことを気にしているのかもしれないね。それを補うために錬金術を勉強しているのでしょう。そうですね、当分は私が見ておりますわ」

「興味を持てることがあるのは、悪いことではないがな」

ふと、「魔法といえば」と、アナスタジアが思い出したように口を開いた。
「延び延びになっていたままのマノンの魔力検査ですが……」

「ああ、リユクのことですわ忘れていたな。教会には頼んであるから、今週中にも連絡がくるだろう」

*

今日は、マノンの魔力検査があるという。

数年前に、僕が絶望を味わったアレである。まあ、マノンは大丈夫だろう。

貴族の子女は、三才から五才くらいで魔力量や属性などを調べるのが一般的だ。その後の教育方針に影響するためである。

能力発掘のため平民の検査も推奨されているが、基本的に魔力は遺伝により授かるのでほとんど形だけのものだ。そもそも魔法や剣術などで功績を上げた者が、爵位を授かり貴族になるわけで、結果的に魔力を持つのは貴族、となってしまうのである。

剣術方面で出世した家でさえ、魔力やスキルで肉体強化ができる者が有利であるのは変わらないので、やはり魔力が多い家系が多いのだ。

マノンは今年六才、本来ならとうに魔力測定は行われているはずであった。

家督に関係のない女の子ということもあったが、彼女は人見知りが激しく、家族以外との接触をひどく恐れる一面があった。

去年はいざ検査の日となった時、直前で激しくグズって結局お流れとなった。

知らない人間が自分を取り囲む状況にパニックを起こしたのだ。もともと敏感なところのある子ではあるが、僕が命を狙われていることで、いたずらに他人に恐怖を感じるようになったのではないかと申し訳なく思っていた。

ともかく、そんなマノンの魔力検査がようやく行われることになった。

教会側も気を遣ったのか、今年は二名でやってきた。優しそうな女性と、まだ幼い手伝いの少年。これも威圧感を与えない為に、こちらが特にと頼んだのだろう。

女性は教会の教師か職員、少年はおそらく奴隷か平民で教会の下働きだと思われる。僕より少し年上といったところか、まだ物慣れない様子できよろきよろしていた。

庭に面した広い客間に、彼女たちと向かい合わせで座った。

こちらは本人を挟んで母と僕が座っている。

先ほどからマノンには、僕の手をぎゅうつと握りしめていた。今朝から緊張するマノンを慰めていたのだが、どうやら時間になって、緊張がピークに達したのか、母が呼びに来て僕から離れようとはしなかった。仕方がないのでこうして一緒に並んでいるという訳である。

「マノン、大丈夫だよ」

声をかけるとマノンは硬い表情で頷くが、手のひらは汗ばんでいた。

にこにこ優し気に微笑む女性は、マノンの緊張をほぐすように自己紹介から始めた。

「教会から派遣されたエマ・ユークです。こちらはお手伝いをしてくれるピエール」

紹介された少年はぺこりと頭を下げた。それにつられるように、マノンもちょこんと頭を下げた。

「では、とりあえず魔力量の測定をして、それから属性検査をしますね」

エマはカバンから一つの巻物を取り出した。

異世界では紙は貴重なものかと思ったが、案外そんなことはなかった。植物から繊維を取り出して紙を作る製法は、錬金術が盛んなこの世界では珍しくもないようだ。ただ魔力が必要な錬金術で作る魔法紙などは、やはり高価ではあるらしい。

ここに出した物もまた魔法紙のようである。丸めてあるそれを広げると、ワックスを塗

つたようなつるつとした表面に、複雑な魔法陣のようなものが書いてあった。

「さあ、マノン様。こちらに手を置いてください」

マノンは、恐る恐る差しだした手をそつと紙へと伸ばす。

瞬間、ぼうつと白い光が浮かび、魔法陣の端から文字をなぞるようにスルスルと光のラインが走っていった。

「きゃっ……!!」

ただでさえビクついていたマノンは、その変化に驚いて手をひっこめた。

それは、この魔法陣のごく普通の反応だったのだが、何分初めて見るマノンには驚くに足る事象だったのだ。

魔法紙はマノンの手のひらに引きずられ、手前に滑り落ちた。

「申し訳ありません。お嬢様を驚かせてしまったようですね」

「いえ、こちらも娘に説明しておくべきでしたわ」

慌てた女性職員が紙を拾おうと立ち上がったのを、アナスタジアは手で制した。

「母様、僕が拾います」

「あら、ありがとう」

母が拾おうとした紙を、僕はしがみついている妹をそのままに、片手で拾い上げた。魔

魔法に描かれた魔法陣は、うっかり魔力を流すと反応してしまうからである。僕なら魔力がほばないので、多少触れても大丈夫だと思った。

紙をテーブルに戻し、表を向けて、広げようとした瞬間――。

僕の指が僅かに掠ったそれは、いきなりカッと眩しく輝いた。思わず目がくらみ、咄嗟に顔を背けたが、次にテーブルを見た時にはそこには何もなかった。

「え……?」

それこそ、頭の中はハテナマークである。さっきまで手に持っていたはずの巻物は、跡形もなく燃え尽きてしまったらしい。

呆然として、答えを求めるように教会の職員の顔を見たが、彼女もまた口を開いたまま啞然としていて言葉もない。

続いて母親の顔を見たが、同じであった。唯一、妹だけが巻物が忽然と無くなったことに、純粹にびっくりした顔をしていた。

――な、なにコレ?」

「お、おそらくお兄様の魔力があまりに多いため、この試験紙では耐えられなかったようです。受け止める巻物も、容量オーバーしたために燃えてしまったのでしょうか」

しどろもどろになりながら女性職員は、慌てて新しい巻物を取り出した。

そもそも巻物は、魔法陣を設置するために錬金された魔法紙と、それを保護したり劣化防止を担う外側のカバーにより成り立っている。そのどちらにも等級があり、設置する魔法陣や、使用されるであろう魔力量によって、必要とされる等級が変わる。もちろん、魔法陣に見合わない巻物を使えば、どうなるかは想像に難くない。

「失礼ですが、お兄様はこの試験紙で検査なさいましたか? ご兄弟がこれほどとなると、マノン様もあるいはこの巻物では足りないかもしれません」

「あ、いえ……いいえ、前回の検査ではリユク、……リユシアンは魔力なしと結果が出ましたので」

「……え?」

母のアナスタジアがそう言うと、エマは再び固まった。

しばらくの沈黙のあと、気を取り直したようにカバンから幾枚かの巻物状の紙を取り出した。最後に出した物は厚手の動物の革のようなものだった。

「すみません、マノン様の検査の後に、リユシアン様にも再度検査をさせていただきますね。こちらの手違いかもしれませんので」

試験紙の巻物をいくつかテーブルへと並べ、エマはとりあえず先ほど同じ物を、手伝いの少年に手渡した。どうやら彼には魔力が無いらしい。魔力に反応する使い捨ての魔法

具を扱うときは、時に彼のような人材が重宝されることもある。

「どうやら今度ほうまくいったようだ。」

マノンの魔力に反応して、魔法陣は緩やかに光を走らせ、上から時計回りにぼつ、ぼつ、と淡いともしびを浮かべた。八つ目を光らせた後、ほわっと魔法陣が熱のない炎のように揺らぎ、フツと紙の上から消えてしまった。

「八節と少しです。次は属性を調べましょう」

この検査での魔力の量は、大まかな目安としてしか測れない。

魔法陣の十分割された枠にどれだけ印が灯るか、そもそもどの試験紙で検査したか、それで判断するのだ。もとより幼少期の検査では、大きな魔力量を測る検査紙を使うことはまずない。まれに魔法使いの家系などで、容量が足りないことがあるので一応、上位のものも持ち歩いているのだという。

属性を調べるのは、各属性を持つ魔石で行う。ポシエットのような光沢のある布で出来た袋を大切に取し取り出したエマは、その中から、いくつかの色のついた石ころを取り出した。魔石は稀にモンスターから取れるもので、そこそ貴重なものである。特定の属性にしか反応しないので、これで使える魔法の属性がわかるのである。

長兄ファビオは火と土の属性を、次兄のロドルクは無属性を持っている。

無属性は、すなわち魔法使いタイプでないことを意味する。ただし魔力や属性が無い、という意味ではない。無という属性なのだ。

属性とは、魔力を出力するための、いわゆる窓口である。持っている魔力を、どの出口を使って放つかによって、それぞれ魔法の種類が変わるのである。

マノンの属性は風だった。風の魔法には、守護や癒やしなどの補助系や、強力な攻撃魔法もある。どちらを伸ばしても汎用性に富んだ属性だった。

マノンもホツとした表情で、ようやく笑顔を見せた。

彼女を部屋から退出させた後、改めて僕の魔力を測定することになった。さつき紙ごと燃えてしまった巻物より、ずっと厚手で装飾のある巻物を取り出した。扱う手つきからして、それ自身が高級なものらしい。

広げると、先ほどとは比べ物にならないほど緻密な魔法陣が描かれていた。それこそ文字が潰れてしまうほど細かくて、とんでもない情報量だ。

細かっ……、よくこんな書けるよね。

魔法陣を魔力で発動できるようにするには、特殊な紙とインク、そしてなにより描くためのスキルが必要だ。魔法陣は、ただ写し取って書いておくだけではないのだ。

鑑定^{かんてい}のスキルを持っている者であれば、もちろん巻物には必要ない。だが鑑定のスキルを

持つものは稀で、重要なポジションについていることも多く、彼らを雇うことの方が難し
いらしい。そこで役立つのが巻物である。

魔法陣の巻物は、相応の魔力さえあれば誰でも、どんな属性魔法でも、また鑑定のように
スキルでも使えるという利点がある。もともと特別な魔法や個人特有のスキルなど、例
外はあるらしいけれど。

じゃあ属性など関係ないじゃないか、とも思うが、事はそう簡単ではないらしい。その
辺の事情は、また父の書斎に行ったときにでも調べるとしよう。

とりあえずは検査である。

ちよっとドキドキしていた。いや、ワクワクかな。だって、無いと思っていた魔力があ
るかもしれないのだ。期待は否応なく膨らんでいく。

僕は、そっと魔法陣に触れた。

先ほどの紙焼失事件のせいでも、すこしばくついていたことは内緒だ。

今度は、……うん、紙は燃えなかつた。

けれど、すごい勢いで魔法陣が外周からぐるりと眩しく輝き、フラッシュのような光を
まき散らしながら、突如、ボンツと描かれた陣が消失した。

この間、約一秒。

なんにしても反応が激しいよ、魔法陣！

どう判断しているのかわからず、僕はチカチカする目を瞬きながら、大人たちを見渡し
た。母親のアナスタジアは、いささか困惑したような顔をしており、エマに至っては、し
ばらく放心したように真っ白になってしまった巻物を見つめていた。

「え、えと。い、いいえ、大丈夫です。まだ上位の魔法陣もありますので」

「待つてください」

ここで、母が待ったをかけた。一番高級そうな、革で出来ている厚手の巻物をほどこう
としていたエマは顔を上げた。

「リュシアンはまだは五才、そこまで正確な数値は必要ありませんわ」

「……ですが、奥様」

おそらく純粹な興味があるエマは、ひどく残念そうだ。

「必要ありませんわ、エマさん」

「は、はい」

もう一度、にこやかに念押しする伯爵夫人に、エマはのけぞるように頷いた。

「で、では属性の方を調べましょうか」

「ええ、そうですね。よろしくお願いします」

なんだかわからないが、魔力がないと思っていた自分にいきなり判明した事実。嬉しくないと言ったらウソになる。

けれど母の表情は複雑だったし、僕にしても素直にもろ手を挙げる気にはなれなかった。なぜなら、これ以上は余計な騒ぎになる。命を狙われている者にとって、何かにおいて特別なことは、決して喜ばしいことではないのだ。

そうしていざ属性の判定をしてみると、周りの期待をよそにことごとく属性に反応しなかった。いや、正確には無の属性があった。だがそれは魔法使いとしてはほとんど意味がないということだった。

幸か不幸か、エマの興味はいささか薄らいだように見える。

それはよかったのだが、むろん僕はひどくガッカリした。

先ほども言ったが、属性というのは魔力の出口だ。火、風、水、雷、土、光、闇の七属性のいずれか、または複数が使えてこそその魔法使いなのだ。ちなみに複数の属性が使える者は、複合した属性魔法を操る者もいるらしい。

無属性はそれらとは別物、いわゆる「気」のようなものだ。身体強化、体力の自動回復、各種レジストなど。もちろん利便性はよく、魔力量が大きければ、かなりの身体能力の底上げが可能といえる。だが、これはどちらかと言えば近接武器向きの能力だ。

不思議なことだが、複数の属性を持つ魔法使いに特化した者は、なぜか無属性をうまく使えないことが多い。そのため無属性はむしろ魔法ではなく、剣術や体術などに分類されることが常だった。

——とはいえ、だ。

なにやら魔力だけは豊富にあるようなので、身体強化を有する無属性のおかげで、僕の貧弱な身体でも、武器を扱うことが出来そうなのは素直に嬉しい。今度、次兄の剣術指南の先生に無属性魔法のことを詳しく聞いてみよう。

こうして急遽行われた二度目の魔力検査は、無事(?)終わったのだった。

前世の記憶を取り戻したのが原因か、はたまた生死の境をさまよったのが原因か、皆無と思われる魔法があると判明した。

いろいろ調べたいこともあったので、さっそく父の書齋に来ていた。

今なら文字もばっちりである。

さて、僕の属性は無。

家族の中では、ロドルクと同じである。武闘派の次兄にとっては重畳でも、豊富な魔力があることがわかり、その気になれば強力な魔法も使い放題だった僕にとっては、ちよっ

と微妙な、むしろ残念な属性である。いわゆる宝の持ち腐れというやつだ。

書斎の本棚から、今回調べたい本をいくつか引き出した。

例の、陣のような図形がいくつか書かれた本の数々。錬金術に使う錬成陣と、魔法やスキルに使う魔法陣がたくさん書かれた書籍だ。

前回は、錬金術に関する本を読んだので、今回は魔法やスキルの魔法陣が描かれた本を選んだ。写生の見本らしき魔法陣ばかり描かれた写本と、魔法の歴史、知識などを細かく解説してある書籍の中から、魔法陣のことが詳しく説明されている分厚い本を選び出し、それら数冊を机に並べた。

開くと、たくさんの魔法陣が書いてあった。もちろんこれはただの転写なので、魔力を流しても魔法は使えない。

緻密な文字列に囲まれた、円陣。

その文字は、呪文に使われる特別な言語でこの世界の一般的な文字とは違った。魔法を覚える者は、この言語も覚える必要がある。当然、呪文を唱えるためだ。

だが魔法陣を描くのに必要とされるすべての呪文を唱えなくてもよい。それが属性を持つ者の強みだった。すなわち、属性（魔力を力のある形に変換する）という膨大な情報、もともと体に具わっているからである。一から十まですべて呪文として文字に起こし羅列

し、描いているのが魔法陣なのだ。ページを捲ると、最初に現れた魔法陣。とんでもなく複雑で、隙間もないくらいに呪文で埋め尽くされているそれは、火属性初級「ファイアボム」と記されていた。おそらく火属性を持つ者なら、小さな子供でも唱えることができる魔法だ。

詠唱ならほんの一言の呪文が、魔法陣だと幾何学模様のように所狭しとひしめく難解な言語で埋め尽くされた代物になってしまう。写生というスキルは、そこまで珍しいスキルではないが、緻密になればなるほどレベルの向上が必要となるし、所要時間もかなりのものになる。また使用するインクは、魔水と呼ばれる特別に精製されたものを混ぜるのだが、これは錬金術で作製するので決して安価な代物ではない。

要は、結果と過程の価値が等しくないのだ。

属性があれば簡単な呪文一つで済むことを、これだけの手間と費用をかけるだけの意味があるのか、という問題にぶち当たるわけだ。

魔法陣の巻物が、あまり普及しない理由はそこにある。

魔力さえあれば、誰でもどんな魔法でも使える便利なはずのツール。

けれどそれは鑑定のような希少スキルや複数属性魔法の、救済的な手段でのみ、意味を

なす代物になってしまったのだ。

「……はあ」

巻物による魔法の使用……良い手だと思ったんだけどな。

属性がない僕でも何とかならないかと、いろいろ書物を読み漁っては見たものの、わかったことは、発動においては呪文に敵わず、手間もさることながら、金銭的にも容易ではなく、そもそも魔法陣を描くのにもスキルがいるってことだった。

小さくため息をついて、ページを捲ろうとしてふと違和感を覚えた。

——あれ？

顔を上げて、驚きのあまり目を瞬いた。

そこには宙にほんやりと魔法陣のようなものが浮かんでいたので。思わず触れようとする、それは形を失って崩れてしまった。

「……今の、なに？」

もう一度、本に目を落とす。

そう、この形だった。ほんの一瞬だけと間違いない。

顔を上げると、やはりソレがほんやりと宙に浮いている。慌てて手を伸ばすが、結果は同じ。すぐに崩れて、空中に流れてしまう。

そして気が付いた。

頭の中に、魔法陣が焼き付いている。こんなにとんでもない細かな魔法陣の、隅々まではつきりと記憶している。

いやいや待ってよ!!

記憶力がいいとか、そんなレベルの話じゃないよね。

試しに書き写してみようかと思ったが、それはできなかつた。どうやら写生のスキルってわけじゃなさそうだ。なんだろう……頭に浮かんだものが映るから、念写？

もしかしてコレに触れることが出来れば、魔法が発動したりする？
魔力検査の際、不用意に触れて紙を燃やしてしまった、あの時のように……魔法陣の発動条件は触れること。魔力が魔法陣をくぐることで、魔法が発動するのだ。

ちなみに巻物を使用するにあたって魔力不足は禁物である。

対象の魔法を発動するに足りなければ不発に終わるし、使い捨てなので魔法陣も消えてしまう。高価な上位魔法の巻物も、一瞬で紙くずになってしまいうリスクがあるのだ。そもそも触れれば即発動、というのものもある意味危険だ。そういう扱いの面倒さ、リスクさみたいなものも利便なはずの巻物が広く出回らなかつた要因の一つかもしれない。

そつと、本に描かれた魔法陣を指でなぞった。

もちろんインクで書かれたそれが反応することはないが、魔力なら、念写で描いた魔法陣なら、やはり魔法は発動するかもしれない。魔法陣を描くインクに混ぜる魔水は、いわゆる魔力の代わりなのだから、可能性はある。

すぐに試してみたが、当然ながら簡単にはいかなかった。先ほどから何度やっても魔法陣が完成しないのだ。揺れる水面に描いたように、すぐにゆらりと歪んで、空中にバラけて霧散してしまふ。

「あ……もう、疲れた！」

魔力量の数値が見えたら、たぶんガッツリ減ってる。

思いつき腕を伸ばし、腕力したように机につつぶした。くしゃり、と白紙の紙が腕の下で音を立てる。メモを取るために用意していた白紙の紙だ。

「あ……！」

慌てて起き上がり、くしゃくしゃになったそれを手に取った。

最初に、空中に出現したから、失念していた。もとはといえば、魔法陣は紙に書かれていたのではないか。

それに念写といえば、写真だよな！

デジカメになってからはあまり聞かないが、昔はよく霊とか超能力とか（本当に存在す

るかどうかは置いて）そんなので活躍したのはカメラだった。イメージとして、紙に定着させる、焼き付ける、という感覚でどうだろうか？

やってみる価値は、あるかも。

結論から言うと、紙への念写は簡単にできた。

メモ用にともらった用紙なので、薄いし目が粗いため裏写りしてしまっているが、間違いない魔法陣が定着している。この能力がなんとというスキルなのか、はたまた魔法の一種なのか、それはわからない。勝手に「念写」と呼んではいけないけれど。

紙に記された魔法陣を、まじまじと見つめた。

陣に触れないように、端っこを持って裏をびらつとめくつて覗き見る。

裏まで完全に貫通してるね、魔法陣が。

発動するか試したいけど、それを部屋の中でやるのはちよつと気が引けた。嫌な予感しかない。間違いない燃える気がする。

僕は書斎から本を持ちだし、薬草園に場所を移した。

薬草園の中央にある温室。その一角に位置する小さな作業小屋……日本人の感覚では立派に家だけど、がある。有名なネスミランドがまるつと入るほどの敷地には、ありとあら

ゆる葉草が栽培されていた。そして特別な環境のものは、気温管理されたハウスなどで丁寧に育てられているのだ。

高原や岩場、雪原、洞窟など、そこにしか育成しない植物もあるので、全部まかなうというわけにはいかないが、乾燥したものなども合わせると、簡単な葉や錬金に使うものくらいならほぼ揃うだろう。しかも母は腕のいい薬剤師であり、鉱石や金属、素材の錬金術でもかなりの腕だった。錬金術の教師としても申し分ない。

だけど上質な紙を作るのに協力してもらうのは躊躇われた。

もともと魔法陣を写す紙は、本来かなりの上位の錬金を必要とし、そんなものを何に使うのか聞かれるのもちよつと困る。分不相応な試みを注意されるかもしれないし、能力のこともうまく説明できそうにないからだ。

作業小屋に燃えそうなものを置いて、温室の外へと出た。

管理人の道具入れの中から適当なものがないかと探して、一本のほうきを掴むと意気揚々と、裏のひらけたところへと移動する。

焼却炉があるところなので、多少の火が出て問題ないだろう。

まあ、初級魔法だしね。

さつそく土を盛ってほうきを逆さに立て、的の代わりにした。

思った以上に興奮しているのか、ワクワクと期待で胸が高鳴った。軽く深呼吸して、少し離れたところに立ち、魔法陣が描かれた紙をひらりとかざす。おっかなびっくり指先で触れた途端、紙は一気に燃え尽きた。

思わず仰け反ったが、それよりも驚いたことに、まるでその灰塵から飛び出したかのようになり、赤く輝く魔法陣が空中に展開されたのだ。

呆然と見守る中、渦巻く火の玉は放たれ、ほうきは四散して弾き飛ばされた。

「お、おお!? うん、でも成功?」

魔法陣が飛び出すとは、どの書籍にも書かれていなかったが、取りあえず考え方は間違っていない。まあ、よし。

……ちよつと勢いもすごかったけど、初級だし、セーフセーフ。

すつ飛んでいって近くの木に直撃し、バラバラになった元ほうきだった残骸は、見なかつた方向で、うんうんと何度も頷いた。

ただね、紙が燃えるのはやつぱり怖い。前髪ちよつと焦げたし。

教会のお姉さんが使っていたような、魔法陣の巻物に使うくらいの高級紙がやつぱり欲しいな。あれは魔力を摩擦なく速やかに流し、消滅する魔法陣を剥がれやすく錬金されているので、土台となる巻物を何度でも使いまわしできるのだ。

ちなみに魔法陣は、紙以外にも写真できる。

ただ特別に処理してない物や場所だと、うまく魔力が流れず、下手をすれば暴発して大惨事になるらしい。魔力検査の時の、許容量を超えた魔法紙が弾けたように、流す魔力量によって受け取る側も、それなりの処置をしておかないとならないのだ。

また巻物の外側を覆うカバーは、魔法紙だけでは賄いきれない様々な機能を補足する為のものであり、それは劣化防止だったり、魔法の暴発、暴走防止だったり様々だ。

当然、収める魔法が強力なものなら、それに見合う強度が必要となるわけである。

「うーん、どうしようかな」

魔法は使えた。魔法陣も描ける。

巻物専用の魔法紙を自分で錬金することが出来たらいいのだけど。やっぱり母に聞いてみるしかないのかな。

錬金術の場合、錬成陣が必要なもの、調合のみでできるものがある。初級の薬などは後者である。そして紙を精製する材料は、魔力を必要とする素材なのだ。

レシピはさつき書斎から持ってきた本に、錬成陣と共に載っている。

ところで錬金に使われる錬成陣もまた、巻物としてはあまり市場に出回ってない。錬成陣は、魔力を使う錬金には必須だが、魔法陣のように複雑怪奇なものではないので、写真



のスキルさえあれば、ほぼ誰でも書けるからだ。

紙も特別な物でなくてよいので、魔法陣とは逆で、簡単に作製できるから、わざわざ買ってまで巻物を使わないのである。

というわけで、錬金はともかく問題は材料である。

この薬草園だけでは全部は揃わないだろう。たしか、なんかの木の皮とか、表面をコーティングする油？　みたいなものがあると思う。

温室を抜け、作業場への道を、考えごとをしながら戻った。

問題は山積みとはいえ、これはかなり希望が持てるかもしれない。

使えないと思っていた魔法が、巻物というアイテムと、偶然見出した「念写」のスキルを持つてすれば、使えるようになるかもしれないのだ。

魔法陣を調べるのは骨が折れそうだけど、そのうち王都や学園都市に行けるようになればもつといういろいろな魔法陣を探せるかもしれないし、見ることにさえ出来ればどんな魔法陣でも描けるだろう。

この時の僕は、この能力をちよつと便利な写生の上位互換くらいに思っていたが、念写と呼んでいるその能力は、全く別物であると、後ほど知ることになる。

魔法陣を写し取るのは、そもそも一瞬ではできない。早くて数分、何枚もの魔法陣が必

要となる大掛かりなものになれば、数時間はかかるのだ。また写生という言葉通り、実際の魔法陣を見ながらしか描けないのも特徴だ。対して、一度見ただけで記憶し、判子のようにボンと一瞬で写し取ることができるのが念写だ。

おそらくスキルというよりこれは異能であり一般的ではない。でなければ、属性も熟練度も関係ない魔法陣は、もつと研究されたに違いないのだから。

「おや、ほっちゃん」

顔を上げると、灰色のツナギに麦わら帽子、首に手拭いをかけた老人が立っていた。

「クリフ……」

年の割には逞しい身体つきで、白髪交じりの髪を短く刈り上げている。日焼けした肌は小麦色で、これほど鍛が似合う男もいないだろう。彼の身分は奴隷だが、今ではこの薬草園全体の管理をほぼ任されていた。

この屋敷へは約十年前、孫のニールと共にやって来た。

もともと農民だったらしく、土いじりは得意だったようだ。ずつと北の、小さな雪国の出身らしく、貧しい土地で税金が払えなくなり奴隷となつたらしい。奴隷商を流れ渡るうちに、息子夫婦を亡くしたため、残った幼い孫と老人という引き取り手が付きにくい状態に陥ってしまい、最終的にここへ来ることになったのだ。

この国、モンフォールにはきちんとした奴隷を扱う法律がある。動物のように無条件で売り買ひされることはなく、犯罪奴隷などの例外はあるが、だいたいは最終的に自分を買いたいことができるような仕組みになっている。

けれど、露天商ろんてんしょうなどのいわゆるもぐりの奴隷商。これは例外で、商業ギルドなどにも入らず、独特の決まりによって動いている。後ろのつながりが複雑で、モンフォールの法律に縛しばられることはないし、基本的には黙認もくにんするより仕方がないというのだ。

その露天商で、たたき売りされていたのがクリフだ。孫らしき幼児とは別売りにされていて、どうしても一緒に売うってくれと懇願こんがんしたため、奴隷商人に折檻せうがんされている場面を偶然、父が目の当たりにしたらしい。

結局、クリフを奴隷商から買ったわけだが、むろん同情からではなかった。

彼の前歴と、差し出された両手を見て、使えろと判断したからだ。交渉こうしょうにより、孫のニールも一緒に引き取ることができた。奴隷商人も、流石さすがに領主相手に無碍むげに断ることはできなかったようである。

また奴隷商には、むやみに折檻するなど忠告するのを忘れない。財産になる奴隷を傷つけられるのは面白くないし、街の美観にも影響えいきょうする、と。

暗に、うちの領地で商売しにくくなるぞ、と脅おどしをかけたのだ。

「今日も錬金術のお勉強ですか？ 必要な素材があれば、ニールのやつに申し付けてくれれば、すぐにも用意させますよ」

当時は幼かったニールも、今年で十三才になっていた。だいぶ遅しくなつて、クリフもかなりの手助けになっていることだろう。

実を言うと、母に許可をもらわずと前から、この薬草園へは出入りしていた。あまり外出することがなかったので、草木に囲まれて開放的なこの場所は、唯一ゆいくつろげる場所だったのだ。当初、内緒ないじゆでここに通っているつもりだったが、クリフとニールにはとうにバレていたらしい。気を遣つかつてそっとしておいてくれたのだが、好き勝手にうろろろしていたので、割と早い時期に彼らと鉢合はちあわせになった。

それから三年近く通い詰め、今ではすっかり気心が知れている。

「ありがとう。でも、今日はちよつとクリフに聞きたいことがあったんだ」

そう言い置いて、僕は慌あわてて作業小屋に駆け込んだ。すぐに大きな本を抱かかえて戻つてくると、クリフはその場でしゃがみこんで今日使う道具の手入れをしていた。

「ぼっちゃん、そんなに走つたら危ないですよ」

「もうっ、ぼっちゃんはやめてつたら。それよりも、これ！」

十才未満なら、ぼっちゃんはおかしくもないのかも知れないが、なんとなくそう呼ばれる

のが恥ずかしかった。……中身は、いい大人だからね。

差し出された本を、クリフは汚れた手で触らないように覗き込んだ。

「錬金術の本ですな。素材のこともお聞きなさいたいんで？」

「というか、在庫。例えばコレとかは、ここにはないよね？」

図解付き魔法紙の作り方、のレシピ集。ハードカバーのやたら重い本は、小さな手にはいささか持て余し気味になるが、それをなんとか片手で持って、クリフに見えるようにページをめくっていく。魔法陣の写生用・再利用可能な耐久魔法紙、と書かれたページを開き、材料がずらりと並ぶ中を、順に指でトントンとさす。

老人はそれを確認して、感心したように頷いた。

「ほう、ようご存じで。流石ですな」

「あ、えつ……と、ううん、知ってたっていうより、勘だよ。これなんかは鮮度がいいほど効果が高いって、ここに書いてあるから置いてないかな、と」

さすがに八才児が、ここの薬草園の在庫をすべて把握しているのは、ちよつと気持ちが悪い。思わず動揺しながらも、材料の一つである動物の脂のようなものを指摘した。

「そうですね、これはモンスターから取れる素材ですな」

「えつ、モ、モンスター!？」

びつくりして危うく本を落としそうになる。

そ、そうか、やっぱりいるよね、モンスター。想像はしてた、でもビビるよ、だってモンスターだよ。

「猪に似た小型の動物型モンスターです。とはいえ、たいしたモンスターじゃないし、冒険者ギルドなら安価で取引されておりますよ。この錬金に使うとすれば、加工するのに魔力が必要なので、素材として買うとなるとちよつと高くなってしまいかもしれんが」

上位の錬金術に使う素材は、素材自体も錬金術で作らないといけないものが多い。そのため、いわゆる下請け業者のような、錬金が必要な素材のみを請け負う錬金術師もいるというのだ。それだけ需要があるということだろう。

「それともう一つの素材、こっちは通称、紙の木と呼ばれるホワイトツリー、すこし森の奥に群生する木なので、これも冒険者ギルドの扱いになりますな」

「冒険者ギルドか……」

さすがに子供が一人で冒険ギルドに買い物にはいけないよな。脂の方は商業ギルドかな？ 錬金術が絡んでいるからね。まあどちらにしても、無理っぽい。

年がどうとか言う前に、そもそも一人でなんか街に行かせてもらえないよ。護衛ぞろぞろ連れて行って？ ムリムリ、だいたい冒険者ギルドに何しに行くんだって話だよ。

「うーん……」

「そうそう、ぼっちゃん」

その後、クリフが世間話のようにさらっと漏らした言葉は、僕にとある決意をさせるきっかけとなった。そう、イケナイことを思いついたので。

というわけで、裏山来ちゃいました！ 当然、内緒です。
わかつてるよ、バレたらこっぴどく叱られます。

でもね、魔法だよ！ 魔法が使えるか否かという瀬戸際なんだ。

僕が、魔法を使うことが出来るか否かという瀬戸際しか手はない。そして、その可能性を先日見出した。もう、辛抱なんかでできるはずがない。

手っ取り早く試せるかもしれないとなれば、それは猪突猛進にもなるうものだ。猪だけに……いや、うまいこと言ってる場合ではない。

この森でのモンスター出現の分布や、注意すべき場所などはクリフにすっかりレクチャーしてもらった。もちろん、一人で行くなんて言っていないけどね。

武器は、練習で使っている木刀と、護身のナイフ。ターゲットは、ホワイトツリーの樹皮と、オークモドキというモンスターの背脂だ。

あの時、素材の入手に頭を悩ませていると、クリフは助け舟を出すようにいろいろとアドバイスをくれた。よっぽど僕が、シヨンボリしていたせいでだろう。

「素材の錬金加工をご自分でなさるなら、ここの薬草園の裏山でも事足りりますよ」
クリフの言葉に、もちろん僕は食いついた。

「え、どういこと？」

「このお屋敷は、魔境と呼ばれる霊峰の麓にあります。山のすそ野は豊かな森で、薬草園の為に拓いた場所から後ろは、ぜんぶ素材の宝庫ですよ」

しかも薬草園付近の一带は私有地なので、基本的には冒険者も立ち入らない。まさに狩り放題、取り放題なのだ。この辺のモンスターレベルはせいぜいDクラスなので、母も、素材が必要になると冒険者を雇って狩りに同行することもあるらしい。

なにそれ、僕も行きたい。

「ホワイトツリーは、特徴的な白い表皮の樹木です。あと、そのワックスに必要な素材は、オークモドキという、オークより小さなモンスターの背脂を加工したものですな」
なるほど、なるほど。

「ぼっちゃん？ もし必要なら、奥様に……」

「え？ うん、そ、そうするよ。今日はありがとう、仕事の邪魔をしてごめんね。また必

要な物があつたら声かけるからよろしくね」

そう言つて、昨日は薬草園を後にした。

ちよつと心配をかけたかな。でもごめんね、もう行くと決めたんだ。

無属性の魔力操作を覚えたおかげで、身体強化はその辺の冒険者なみの防御力ぐらいあるので、自分の身は守れる。もちろん、へつぼこな自覚はあるので無茶はしないよ。無理そうなら早々に引き上げるつもりだ。

でも、何事もやってみないと始まらない。もとよりそういう性格だった。リュシアンとしての消極的な印象に隠れがちだが、なんでも試してみないと気が済まない元来の性格がこうして時々顔を出してしまう。

幸いここ数日、薬草園に籠つてひたすら素材錬金と、薬の調合に没頭していたので、一日顔を見せなくてもそれほど心配はされないだろう。

練習用の木刀を腰ベルトにぶら下げ、リュックを背負い、ナイフや傷薬を詰めたポシエツトを肩にかけて、初めての小さな冒険はこうして始まった。

森に入っていくと、興味を持った薬草、木の実を片端からポシエツトへ突っ込みながら奥へと進んでいった。

もとは魔法が使えないから始めた錬金。今は魔法を使うために必要な錬金。何かを補う

ために始めた錬金術だったが、最近ではそのものが楽しいのも事実だった。

研究に没頭しすぎて、母を当惑させたりもした。先日、傷薬を作ったとき気が付いたのだが、魔力回復薬を作るときの錬成陣を応用して手を加えたら、体力と魔力の持続回復薬が出来てしまった。いわゆる自動回復薬である。飲むとしばらくの間、微弱ではあるが回復し続けるというものだ。

軽い気持ちで母に披露したら、ひどく驚かせることになった。どうやら継続して回復するような薬は今までなかったようなのだ。……あまり余計なことをするのはやめよう。やるならこつそりやろうと、決めた瞬間だった。

それにしても、錬金術の本に載っていたフリーバッグが欲しいな。すぐにいっぱいになってしまうポシエツトにため息が漏れる。

錬金術と縫製で作る魔法のカバン、通称フリーバッグ。これも材料や、製作技術、錬金技術によって内容量が変わってくるが、バッグの中は異空間になっており、信じられないほどの収納能力を持っている。参考に載っていたものはワールドドラゴンとかいう（名前にドラゴンとついているが、トカゲのような形をしていた）モンスターの革をつかった物だったが、外側は革だろうが布だろうが丈夫なら何でもいいようだ。問題は内側だ。確か、ちよつとレアで面倒くさい材料だった気がする。

言うまでもなく、珍しいアイテムで大変高価なカバンだ。……欲しい。朝一番で屋敷を抜け出したので、お昼くらいにはかなり奥地にまで到達していた。驚いたことに、疲れをほとんど感じない。これが身体強化の恩恵なのだろうか。休憩なしで歩いてきたので、木陰で一休みしようと水筒の蓋を開けた。

「あれ、この木って」

持ってきたお茶を呷って上を向いた時、ふと気が付いた。

白っぽい表皮を持った背の高い木々が、あたり一面に並んでいた。どうやら、いつのまにかホワイトツリーの群生地に入っていたようである。

ひとしきり休憩すると、さっそく素材を採集することにした。

難しいことはなにもない、とにかく皮を剥がせばいいのだ。ナイフで切り込みを入れ、間に刃を差し込み槌子の原理で一気に剥がす。今回は試して作る分だけなので、持ってきたリュックに入る分のみ取った。

「そういえば、ここまでモンスターとは出会わなかったな」

錬金術で作った魔物除けの香り袋が、思った以上の働きを見せているようだ。

もともとこの辺まではモンスターはあまり出ないとも聞いた。ここから先が、いわゆる魔境につながる奥地になる。私有地に危険地帯ってどうかと思うが、この山を含め魔境と

呼ばれる森林地帯も領地という意味では、全部ウチの管轄内である。

もっとも屋敷の敷地としては、葉草園も含めこの森手前半分までが我が家ということになるのだろう。野球のドーム何個人入るのだろうか……。

この森手前のモンスターはDクラスまでがほとんどだが、山向こうの魔境からごくたまに渡ってくるBクラス以上の魔物が出没することもあり、冒険者を使って山狩りをすることも稀にあるらしい。

さて、あとはオークモドキの背脂だ。

オークモドキは、Fクラスモンスター。頭は豚で、人間のような身体を持つオークと違って、まんま豚や猪っぽい姿形だ。ちよつと巨大な豚という感じなのだが、どうやら時々二足歩行するらしい……怖い。

食欲旺盛で、雑食。集団で行動することがあるので厄介だが、基本的には新米冒険者がラット系、ワーム系などの雑魚の次に狙う獲物らしい。

ワーム系といえば、実はウチの葉草園などにも出没していて、でっかい芋虫だなんて思ってた。今考えてみれば、あれもモンスターだったようだ。クリフがまるで畑に出没するナメクジのような感覚で、プチッとやってたから気が付かなかった……あれ？ クリフって結構強いのかな。……うん、とりあえずオークモドキだったね。

それ以上考えるのを放棄して、もう一つの素材採集に向け準備を始めた。多少の危険は伴うけど香り袋を土に埋め、さらに奥に入っていた。虎穴にいらずんばなんとやらだ。正直なところ、少し焦っていた。そろそろ帰らないと、夕方までに屋敷に着けないからだ。とにかくモンスターが出ないことには始まらない。

どのくらい歩いただろう、さすがにそろそろ引き返した方がいいかな、と考えた頃。カサツと葉っぱが揺られて、いきなり肌色の生き物が獣道の真ん中に飛び出してきた。

「……っ!?」

オークモドキだ！

突然のエンカウントにこちらも驚いたが、向こうはもつと驚いたのだろう。ガバツとすごい勢いで立ち上がった。本当に二本足で立つんだね!? とのんきなことを再確認している間に、モンスターはこちらに向かってきた。

基本的にオークモドキは、人を見かけると逃げられるらしいのだが、なにしろ僕は子供で、おまけに一人きりだ。相手はすぐに雑魚と判断し、今や完全に舐めきっている。

初手の突撃に、とつさに武器を取ることも忘れた僕は、ごろりと横に転がることで、なんとかオークモドキの猛攻を避けた。

……び、びっくりした！

一度距離を取って、巨大な獣と向かい合う。攻撃を避けられたことで、向こうもひとまず様子を見ているようだ。

僕は、ドキドキと踊りまわる心臓をなんとか落ち着かせて、油断なく腰に下げた木刀を抜いた。けれどココは森の中、長物はあまり振り回すことができない。オークモドキから目を離さず、なんとかカバンにしまったナイフを取り出し、そちらを利き腕に持った。

オークは武器を持っているが、オークモドキは武器を持ってない。なぜなら前足が蹄だからだ。立ち上がるのは相手を威嚇するためで、攻撃する時は、普通に四本足で走って突進してくる。武器は、鋭い牙と、硬い頭蓋骨だ。

顧みて、こちらは盾代わりの木刀と小さなナイフのみ。そして立ち姿は、見事なまでのへつぴり腰である。負け惜しみではないが、前世では戦闘と無縁の人生を送ってきた日本人なのだ。剣の稽古はしているもの、実戦ともなれば腰が引けるのも無理はない。

牛のように、オークモドキは前足で土を蹴りつけている。やる気満々だね。だけど、もしイノシシのように猪突猛進ならやりようはある。それを狙って、少し身構えた。

案の定、突進してきたオークモドキ。思い描いていた通りに盾代わりの木刀でいなし、素早く体を翻した。しかし――。

背中を取ったと思った瞬間、丸々とした姿に似合わぬ素早さで反転したオークモドキが、

無防備な脇腹に頭突きをしてきた。

「うっ……!!」

思いっきり吹っ飛び、大木にぶつかって、それでも勢いを殺せずバウンドしながら転がり、最後は逆さまになってようやく止まった。木刀で防御はしたものの、幼い身体は小さい上に軽いので、吹っ飛んだらどうにもならない。

身体強化の恩恵もあり、痛いことは痛いだが、打撲などのひどい怪我はしていない。びっくりしてちよつと息が詰まったけど。

同じ理由で、しつかり踏ん張れば、これくらいは耐えられると思う。ただ、慣れていないので間に合わなかったのだ。

「む……、ぜんぜん修業が足りないなあ」

もう一度、オークモドキと向かい合う。向こうはこちらを完全に雑魚だと認定したのだろう。逃げる気はなさそうだ。

くそう、ぎゃふんと言わせない。

むやみに逃げ腰になるより、この相手ならしつかり正面から受けたほうがいいかもしれない。不意ながら、自分の防御力はさっきの攻撃を受けたことで試せたし。

土煙を上げてオークモドキが突進してきた。今度は、剣でしつかり受け止める。

よし、足に意識を集中すればちゃんと踏みしめる力も増強できてる。もとより魔力操作は、先生にも褒められたんだ。

モンスターの足を止めてしまえばこちらのもの、すでに手の届くところにあるモンスターの脳天に向かってナイフの柄を思いっきり落とした。

咄嗟に刃先で突き刺すのを躊躇ったのは、武器を持つことのなかった日本人としては致し方がない。これからモンスターを狩るなら、おいおい慣れていくしかない。

「……あれ？」

そして、地面に転がった獲物を見下ろす段になって、僕は重大なことを見落としていたことに、ようやく気が付いた。

「……これ、誰が解体するの？」

昏倒している獣を前にしばらく途方に暮れていたが、ここは何時モンスターが出没してもおかしくないフィールドなのだ。まずは暴れないようにしつかり拘束すると、ナイフを片手に、恰好だけは捌く準備が完了した。

「困ったなあ……」

必要なのは背脂だが、素材を剥ぐという作業は慣れない人間がやると品質が落ちるって言うし。クリフなら何とかできそうだけど、問題はこれをどうやって持って帰るかという

ことだ。考えてみれば、こういう仕事は冒険者の役目だと無意識に考えていた。

実際、母も狩りをするときは冒険者を雇っているし、素材を剥ぐのも彼らに任せている。無自覚のうちに役割を分担して考えていた。

貴族であるということ。上に立つということ。中身は身分制度の感覚がない日本人だが、生まれてこのかた貴族として生きてきた記憶も存在する。

常に誰かが助けてくれる環境を、当たり前だと思っただけはいけない。そんなことは前世でいやというほど骨身に沁みたまはらずなのに。

人間というのは楽な方には容易く馴染みやすいものだ。

いざれ独り立ちする気なら、なんでも出来るようにならなくてはならない。ましてや僕は、追われる身になる可能性さえあるのだから。

明るすぎる未来の展望に、否応ない重たい息が漏れた。

とりあえず今は、できないことを嘆いていても仕方がない。今日はこのまま帰り、明日にでも事情を話してクリフと一緒に来てもらおうのがよさそうだ。

怒られるのは、もう仕方がない。

「……っ！ わあっ!？」

そんな時、どこからか人の騒ぐ気配がした。むしろ、悲鳴のような？

振り向くと、かなり後方で草むらがガサガサと激しく動き、やがて一人の少年が転がり出てきた。まるで何かを振り払うように、顔を庇うように身を丸めている。

「つて、え!? ニール、なんでこんな所に」

とつさに駆け寄ろうとして、後ろから追うものの正体を知った。

「あれは、タイガービー……!」

モンスタールランクD、なんとオークモドキよりも上だ。一言で説明するなら、でかい蜂である。綿々模様の腹が、ゆうに僕の胴体くらいはある。

この森では厄介な類のモンスタードだ。集団で行動する上に、さらに仲間を呼ぶことも多い。とがった口は鋭く、噛まれたらただでは済まない。蜂と言ったら毒だが、お尻の針は常に出ていて、僕の持っているナイフと変わらない大きさだ。刺されたら、毒に冒される前にイチコロだろう。

これは、逃げることを考えないといけないエンカウンドだ。けれどニールを庇いながらの逃走となると、回り込まれる。だったら……。

ポシエットをひっくり返して中身を地面にぶちまけた。

せつかく採集した素材になりそうな葉っぱや、木の実、植物の蔓などが無造作に放り出されたが、今は悠長に一つ一つ探っている暇はない。

「……っ！ あった」

ニールの方を見ると、すでに数匹のタイガービーに囲まれていた。しかもなぜか激怒状態。いったい何をやらかしたんだ、ニール！

小さな布の巾着袋、それはオークモドキが集団でいた場合に撒いて逃げるために用意していたもの。大きく振りかぶって（野球なんかやったことないけどなんかそんな感じで）正面のタイガービーに向かって思いっきり投げた。

ビーの胴体に当たったそれは、衝撃でほどけて中の粉を一気にぶちまけた。

謎の粉攻撃を食らったモンスターは、とっさに距離を取った数匹が逃げていき、至近距離だった個体は次々に地面に落ちた。

「必殺、痺れ葉」

って、ほんの数分動けなくなるだけなんだけどね。しかも本来の使い方とは異なる。マヒを緩和する治療薬を作るための植物を、粉末状にしたものだ。毒と薬は表裏一体って言うでしょ。本当にピンチになったら試しに使おうと思って持ってきてよかった。

手拭いでマスクをしてから、急いでニールのもとへ走っていった。

当然ながらニールも痺れている。だよね、うん、わかってた……ごめんね。

「動けないよね。でも、出来るだけ僕に掴まって」

早くしないと、もう動けそうなビーがモゾモゾしている。ひと回り以上大きなニールを無造作に引き上げ、担ぎ上げるようにして背中に背負った。身体強化はこんなところでも地味に役立つ。地面を足が引き摺っちゃうのは、我慢してね。

「ふう、なんとか逃げられたね」

「すみませんでした！ 坊ちゃん」

ニールはやつとマヒから回復したようだ。身体を直角に折り曲げて、凄い勢いで頭を下げた。いつもは高い位置にあつて見えないつむじが、すぐ目の前にある。

「うーん、あれだよね。たぶんだけど、クリフに言われて来た？」

「う……はい、その通りです。本当はこんな奥に入る前に止めようとしたんですが、坊ちゃんときたら足が早くて、途中で見失っちゃって」

どうやら追いついては見失いを繰り返しているうちに、うっかりキラビーの巣の近くを通ってしまったらしい。

「坊ちゃん強いですね！ それに力持ちでびっくりしました」

担ぎ上げた時、もちろん意識のあったニールは、なんなく背負われ、そのまま駆けだした僕に仰天したらしく、ちよっと興奮気味にそう言った。

「そっか、クリフにバレてるんだ。うわあ、怒られる」「たぶん俺も怒られるから、一緒に覚悟を決めましょう。引き留めることが出来なかったばかりか、助けられちゃいましたから」

「ごめんね、ニール」

「いえいえ、俺の不甲斐なさのせいだし、坊ちゃんのせいじゃないですよ。さて、さっきの荷物を拾いにいかないと」

そうだった。全部放り出してきてしまった。それと、オークモドキ！

「ニールって解体できる？」

「出来ませんが……ああそうか、オークモドキを仕留めてましたね」

先ほどの場所に戻り、キラビーが居なくなっているのを確認してから、役割を分担して作業を開始した。僕は放り出した荷物を、ニールがオークモドキの解体を、である。

黙々とオークモドキを解体しているニールの横で、僕はそこら中に散らかっている素材や薬瓶をちまちまと拾い上げていた。

なんでも自分で出来るようにならないといけないと決意した矢先、こうしてニールに解体を任せているあたり情けないが、人間すぐにどうにかなるものでもない。

「ぼっちゃん。はいこれ背脂、大丈夫そうですか？」

「さすがニール、手際がいいね。ありがとう、助かったよ」

ニールは幼いころからクリフにガッツリ鍛えられている。農作業のイロハはもちろん、こうした獲物の解体などもお手の物だ。本当に見習いたいものだ。

拾い上げた薬瓶を手にとり、割れてないか確認する。この世界のガラスも、元の世界の物とさほど違いはない。透明で透き通っており、衝撃を加えると割れる。通称ガラスの石と呼ばれる鉱石を、錬金により熱加工して作るのだ。

確認して拾い上げた薬瓶をポシエットに仕舞い、次に素材を包むための大きな紙を広げた。これは特殊加工して脂や水を通さないよう魔法錬金したものである。

「ここに……って、ニール足どうしたの？」

「大丈夫です。ビーに襲われた時、ちよつと擦りむいただけですから」

よく見ると、濃いグレーのズボンが擦れて、わずかに血がにじんでいる。どうやら転んだ時に地面に擦ったのだろう。さらに捻りでもしたのか、かなり痛そうだ。

「ちようどいいや、コレ使っていいよ」

「え？ いや、それって錬金した薬ですよ？ そんな高価な物……」

先ほど拾い集めた薬瓶を取り出すと、驚いたニールが慌てて手を振った。

調合のみの薬は比較的安価なのだが、魔力錬金を施した薬は高価なのだ。効き目が全然

違うので、ある意味別物と言ってもいい。

「葉草園の材料で、僕が錬金したものだから、気にしないで」

「う、うわあ……待って、そんなジャバジャバと!？」

ズボンの裾を引き上げ、赤く皮膚がめくれ上がった痛々しい傷に、容赦なく薬をぶちまけた。これは傷薬、色は一般的に赤。続いてもう一本、透き通った青い液体だ。青い薬は体力や気力を回復させる。僕の作った薬は魔力も微回復させ、それら効果はしばらく続くが、見た目は普通の回復薬と変わらない。

「相変わらず、効き目が気持ち悪い」

みるみる傷が治っていく様子は、何度見ても慣れない。

「俺の台詞ですよ。こんなの唾でつけとけば治るのに、勿体ない」

唾つけるとかやめて。どんだけ雑菌がいると思ってるの？ まあ、ともかく治ってよかったよ。とてもじゃないけど、足引き摺った状態でここから帰るの無理だからね。

改めて二人はそれぞれ手分けして、荷物を片付けて帰路へとついた。

オークモドキも簡単に切り分けてちゃんと持って帰ることを忘れない。何しろ背脂取っただけでポイッと捨てちゃ、いくら何でも浮かばれないからね。

二人そろって屋敷に戻ったのは、すっかり日が暮れたころだった。

どうやら捜索隊を結成しようかという、とんでもない騒ぎになっていたようだ。生まれて初めて優しい母が怒るのを目の当たりにした。あまりの形相に手を上げられるのも覚悟したが、予想に反してその腕は、背中へと回された。潰されるかと思うほど強く抱きしめられ、泣きながら怒る母の姿に、不覚にも泣き出しそうになってしまった。本当に心配をかけてしまったのだと、反省しかない。

初めての大冒険は、こうして大波乱のうちに終わった。

もちろん、やったことへの代償は支払わなければならない。

僕は、父親によって、一週間の謹慎を言い渡されてしまった。屋敷の外へ、一切出てはいけないと厳命されたのだ。もちろん葉草園にも行ってはいけない。

結局、僕は父の書齋に籠った。

ただ、せっかく集めた素材を無駄にするのはかわいそうだと行って、母が錬金に必要な道具を書齋の隅に設置してくれた。ありがたいことに、大掛かりなものは無理でも、紙の精製くらいならギリギリできそうである。

あんなに心配させたのに、母には本当に頭が上がらない。錬金の傍ら、冒険者向けのモンスター解体の本なども読んだ。記憶はできても、こればかりは実地で覚えなくてはどうにもならないので、知識だけ詰め込むことにした。そんな

こんなで一週間の謹慎期間は、あつという間に過ぎていったのである。

完成した魔法陣用の巻物を、僕は満足げに眺めた。

背脂の品質は申し分ない。素材剥ぎが、的確かつ丁寧だったからだ。クリフ仕込みのニールの腕は流石だった。

そうそう、ニールもあの後、クリフの岩のような拳骨を食らったらしい。本当にごめんね、申し訳ないことをしてしまった。後で二人にも謝りにいかないと。

綺麗に装丁された巻物を机に広げて、さっそく魔法陣を念写してみた。ほんやりと光りながら紙に定着した魔法陣に、念入りにチェックを入れる。大丈夫、裏写りしてないし、すごくノリもいい。文句なしだ。

とりあえず初級の攻撃魔法をいくつか作ってみた。きちんとした写生用の資料には、残念ながら初級魔法の魔法陣しか載ってなかったのだ。

難しそうな分厚い本には、まるでネタのようなものすごい魔法陣が載っていたが、あれは伝説、というか眉唾に近い。だって、五連魔法陣だよ!? 火属性の上級魔法らしいけど、有りえないでしょ。巻物が五本とか! 探してる間に戦闘が終わっちゃうよ!?

まあ、加えて言うなら、世の中にはもっとすごい魔法があるらしいけどね……ほんとか

いな。

とにかく、いろいろな魔法陣を見てみたい。

一番手っ取り早いのは王都へ行くことだけ。今の僕の状況では、やっぱり学校へはやらせてもらえないかな。

貴族が一般的に通うのは王立学校の教養科。でも僕は、できたら初等科に行きたいと思ってる。いわゆる才能のある人材を発掘し、育てるのが目的の、王国が学費を全面免除している学校だ。魔力さえあれば、平民でも無料で通えるのが特長である。

貴族の礼儀作法とか、横のつながりだとか、そういう社交的な面が強い教養科とは違い、こちらは魔法や剣術、一般教養などがメインである。

でも正直な話、もつと行きたいと望んでいる場所がある。

それは上の兄、フアビオが通っているドリスタンの学園都市だ。他国だし、たぶん許してもらえないだろうから、これは内緒なんだけだね。

*

「リユクはどうしてる?」

まだ夜の明けきらない食堂で、早めの朝食をとっていたエヴァリストは、開口一番わが

家の謹慎坊主の様子を、妻に聞いていた。

「きちんと大人しくしていますわ。あなたの書齋で、錬金と読書に明け暮れているようですよ」

メイドに食事を運ばせると、アナスタジアは早々に人払いして夫の給仕を始めた。早朝の食事に、わざわざ自分を呼び出したことを配慮してのことだ。

「あいつの場合、罰になっているかどうかわからないな」

「ふふ、そうですね」

薬草園で採れたハーブで作ったお茶を出しながら、アナスタジアはやがて表情を引き締めて、本日の早朝に届いた手紙に目配せを送った。

封蠟に閉じられた手紙が、お茶を受け取ったエヴァリストの手元にある。

この国の民で、あの紋章を知らぬものはいないだろう。王冠を戴いた二匹の獅子が描かれたそれを。

「それで……お手紙は、やはり陛下からですか？」

「ああ、どうやら王太子が行方不明らしい」

さらりと返された返事に、アナスタジアは持っていたポットを落としそうになった。

「えっ……学園都市に留学中の？ 一体、いつ」

「ほんの数日前だ。情報開示はしていないが、王都はその話題で持ちきりだ」

どうやら王太子失踪は、護衛のすぐそば、それも衆人環視のもとでのことだったらしい。まるで忽然と消えたようだ、と噂されている。

「まさか……」

王太子様まで？ アナスタジアは、口元を押さえながら「なんて恐ろしいことを」と呟いた。

「いや、正直それはわからない。いくら奴らでも、あれほどの人前でそんな大それたことをするものかな」

奴らとは、もちろん息子を狙っている輩のことだ。

「実際……今回の騒動がきっかけで、陛下は数年前の第四王子失踪の案件を放っておけなくなり、捜索を強化して……」

手紙を、ひらりと見せる。

「こうしてリュクにたどり着いたのだからな」

（陛下におかれては、以前から気が付いておられたご様子だったが、今回のことで黙認もできなくなった……というところか）

「……奴らにとっては、数蛇もいところだ」

今まで秘密裏に事を進め、忘れられた王子を穩便に闇から闇へと葬り去ろうとしてきたのだ。本来なら小さな憂慮をきつちり排除して、それから万全を期して王太子を……という手筈だったはずだ。

エヴァリストは、思案気に頸に手を当てて忌々しそうに舌打ちした。

「どちらにしろ、いい機会かもしれない。もとより敵にリュクのことを知れている以上、これからも狙われる。王宮に戻ることが危険だというのは確かだが、ここまで来れば決めるのは陛下と……リュク」

言いかけてすぐに小さく首を振って、改めて口を開いた。

「リュシアン殿下だ」

アナスタジアは黙って夫の言葉を聞いていた。小さな沈黙の中、窓の外では呑気そうな鳥のさえずりが聞こえてくる。すっかり陽も昇って、夏らしい日差しが明るく緑の大地を照らし始めた。

かちやり、とエヴァリストがティーカップを持ちあげて口をつける。

「……お前の姉、シャーロットが亡くなって、もう六年になるか」

「ええ、お姉様と……ミツシエル殿下。あんなにお小さかったのに」

シャーロットとは、アナスタジアの腹違いの姉で、モンフォール王国の三の妃だ。そし

て彼女の長男で、モンフォール王国の三番目の王子ミツシエル。

母親のシャーロットと共に、実家への一時帰省の途中でその事件は起こった。

馬車が山賊に襲われ母子共に重傷を負ったのだ。この時すでにシャーロットは懐妊していた。護衛の騎士たちの命がけの働きで、隊の一部はなんとか王都へと戻り、シャーロットは辛くも命を取り留めたが、病床のまま早産で次男を出産した。そして、幼いミツシエル王子は、その時の怪我が原因で帰らぬ人となってしまったのだ。

紆余曲折の後、オービニユ家の三男となった四番目の王子。

生まれ落ちる前から命を狙われ、そして継続して危険に晒され続けている我が子と思うと、その元凶とも言える人物からの手紙を破り捨てたい衝動に駆られたが、なんとか堪えたエヴァリストは、力の限り握りつぶすに留めた。

どちらにしても断れない招集なのだ。それならいっそ、これまでたまりにたまった恨み言でもぶちまけに行こうと開き直ることにしたのである。

*

「えっ？ 王都ですか」

謹慎が明けるとすぐに父に呼び出しを食らった。もしかして、あまりに鍊金だ、読書だ

と自由にやりすぎて、罰になってないとしても注意を受けるのかと思っただが、そうではなかった。父の、王都への旅へ同行するようになると言われたのだ。

実際、行ってみたいと願っていたので渡りに船ではあったが、なぜ急にそんな話になったのか、寝耳に水もいいところであった。

「熱心に勉強しているようだな。それに、魔法も」

僕がこそこそと巻物を使って魔法を使っていることは、どうやら筒抜けになっているらしい。隠れてやっているつもりだったが、すべてお見通しだったようだ。いい機会だったので、父には、特殊なスキルで魔法陣を描けることを話しておいた。

「まだまだ課題は山積みです。もう少し巻物を強化するか、魔力操作で乗り切るか……どちらにしても、すぐにといいわけにもいなくて」

無属性の魔力操作はなんとなくわかるのに、魔法に流す魔力の量は、なんだか調整が難しい。何度か葉草園で試した際も、魔法陣を設置した紙は跡形もなく燃えてしまった。どうやら対象魔法に、必要以上の魔力を流しているのが原因らしかった。そのため、ちょっと無茶をして森に入り、丈夫な魔法紙を作製しようと思っただけだが、なかなかうまくいかないものだ。

魔法発動のプロセスを、すべて自動で調整できる属性持ちに対して、何から何まで手動

で行わなければならない自分とでは、端から勝負にならない。

もともと巻物での魔法発動には、いろいろ弊害があるのはよく聞く話である。

ほとんどのトラブルは魔力不足による不発らしいのだけだ。

「ともかく、お前にとって魔法が使えたことは僥倖だった」

ポツリと漏らした父の言葉に、僕は思わず反応しそうになった。それはつまり防衛手段として、ということだろう。

父は、僕の顔をじっと見つめて、やがて深いため息をついた。

「……お前は聡い子だ、もしかしたら己を取り巻く状況をおぼろげながら気が付いているのかも知れないな」

ついにこの時が来たということだろうか？

王都へ行くということとは、つまりそういうことなのか。

今年の春先、僕は八才の誕生パーティを近隣の貴族を招いて祝ってもらった。あれは、いわゆるお披露目の儀式である。もちろん長男などは、もっと早い時期に大々的にお披露目をするが、次男以降も社交場で困らないように、ある程度の年齢になると貴族社会に紹介されるのである。それは、大人に一步近づいたという行事の一つなのだ。

「本当なら、もう少し大きくなってから……と、思っていたのだが」

そう言って、父は上から下へと視線を落とした。

確かに小さいですけどね。そんなに見下ろさないでください。

正直、いささか発育が悪い気がしないでもない。八才と言ったら、小学二年、三年？ そんな所だろうか。少なくとも僕は、平均よりかなり小さいだろう。

それでも父は、お披露目を済ませた紳士として扱うことに決めたようだ。

引き出しから恭しい仕草で取り出したのは、豪華な装飾の封筒だった。なぜかクシヤクシヤに折れ曲がった跡が付いていたが、その封蠟の意匠には見覚えがあった。

この国の人間なら、子供でも知っている紋章だ。

やはり、避けては通れない話なのだ。前世の記憶が戻るきっかけとなった、例の毒殺未遂事件だけではなく、これまでも幾度となく命を狙われてきたのだから。

第二章 王都へ

出立までの数日、護衛付きでもいいから森に入りたいと父に頼んだが、さっくり断られた。前回の失敗を踏まえて、ちゃんと報告してから森に入ろうとしたわけだが、やはりダメだしを食らった。くそう、早く大きくなりたい。

だけど、僕だってそう簡単には諦めない。ここで、前にスキルのことを説明していたことが役に立った。何から何まで、既存の物がそのまま使えないスキルだ。自分なりに研究して、オリジナルの巻物を作るのだと熱弁した。王都へ行く前に、少しでも護身になるように準備がしたいと言ったら、ようやく折れてくれた。

森への立ち入りは許してくれなかったが、町へ降りることを許可してくれたのだ。なるほど、商業ギルドと冒険者ギルドで購入しろということだ。

芯棒が入った巻物は、魔法陣を定着させる魔法紙を巻き取る補助アイテムで、既製品を商業ギルドで買えば済む。また、錬金の材料は冒険者ギルドの方がいいだろう。何しろ素材は冒険者ギルドの方が安いし、種類も豊富だからね。

さっそく明日にでも行こうと決めて、そわそわと出かける準備をしていると、母が部屋

を訪ねて来て、少し古ぼけた肩掛けカバンをくれた。いつも使っているポシエットより少し大きめで、見かけは煤ぼけているがキチンと鞣された良質な革を使っている。

「娘時代に使っていたカバンなのよ。少し古いけど、容量はかなり大きいものだからきつと役に立つわ」

それは例の魔法のカバン、フリーバッグだった。

これは本当に嬉しかった。容量は20枠で、一つが風呂桶一杯分くらい？ 縦にも横にも制限がなく、要するにその体積分は入るといふものだ。便利すぎるだろう、異世界のカバン。そのうち自分でも絶対に対に作ってみよう。

ちなみにこの世界の錬金術は、まんま錬金という意味とは少し違う。調査、合成、縫製、鍛冶など、過程に錬金作業があれば、錬金術として一括りにされる。

逆に錬金はしないが、それぞれの職種で専門職として極めている者もいる。

縫製や鍛冶などがそれだ。魔力をもたないドワーフ族や獣人などは、職を極めることで付加価値をつけているのである。

当日の買い物には、街に詳しいニールが付き添ってくれるらしい。あと、もちろん護衛もイッパイね……とほほ。

旅支度と明日の買い物準備をあらかじめ終えると、久々に次兄の師匠に剣術指南を受け

ることにした。しばらくは魔法陣に夢中だったので、剣術の授業はちよつとサボり気味だったのだ。

「リュシアン様は、お身体が小さいのでナイフを使うといいかもしれません。失礼ながら長剣だと、腰に差した時……」

そうだね！ つつかえるね、わかってたっ！

子供用の木刀は短いので大丈夫だが、正規の剣に子供用などない。そこで使いやすい短刀、ナイフ術を教えてくれるというのだ。

ナイフを使うには懐に入らなくてはならないが、むしろピンチなのは懐に入られた時なので、却って都合だと言える。僕は、魔法を主力にするつもりなので、ナイフはあくまで近接戦がやむを得ない時だけだ。いざというときは投げることもできるね。

剣術指南の先生は、元はやんごとないお方の側仕えをしていたそうだ。どうりで物腰が洗練されていると思ったよ。言葉使いとかね。剣の師匠などと聞くと、荒くれ冒険者崩れなんかを想像するけど、ぜんぜん違った。どちらかという執事の立ち居振る舞いに近い。ちなみに僕は、弟子ではないので師匠とは呼んでない。ロランと、名前で呼んでいる。

なんか名前までかっこいいね、まるで英雄っぽい……違うよね？

近いうちに王都へ行くと言ったら、ナイフを二本くれた。

銀色に輝く材質。形や装飾は質素だけど、錬金術をやっているからこそわかる。これは、そう易々と人にくれてやっていい代物ではないと思う。

それにこの柄、小さいが、はっきりと見たことのある意匠がついていた。

「こ、……これって」

堅そうなその男は、意外にも伊達男がするように片目をつぶった。

「遅くなりましたが、お誕生日の贈り物だそうです」

この人、本当に何者!?

今日は、いよいよ街でのお買い物。昨日はわくわくして眠れなかったよ。遠足前の子供か、とも思うけど本当に子供だから仕方がない。

元々あまり外出しなかったので、実のところ町を歩くのは初めてだ。行っても馬車から降りなかったからね。なんでもつたいたいことをしてたんだらう。

朝一番の街は、活気にあふれていた。

屋敷は丘の上にあるため、ここまでは馬車での移動だったが、街の出入り口にある馬車置き場に寄って預けることにした。せっかくだから、ぶらぶら歩きたいよね。

行き先は商業ギルド、そして冒険者ギルドだ。ギルドは所属しないと割高ではあるが、

信用のおけない露天商などより品数も多いし、粗悪品を掴まされることもない。

装備の方は、取りあえず先日貰った物がある。

ナイフと一緒に、それを収めることが出来る革製のベルトと、同じ革で出来た籠手まで用意されていた。まさに至れり尽くせりである。ロランは結局、あのナイフの出どころを言わなかったが、聞くまでもなく柄に彫られた意匠はすべてを物語っていた。

少なくとも投げちやいやけないヤツだ……。

ということ、まずは商業ギルドへと向かうことにした。

商業ギルドは、この街ではかなり大きい建物の中のひとつだ。この国のみならず各国で展開されており、ここは支部の一つである。年会費を支払えば加入することができ、店の開業や国への届け出など面倒な手続きなども簡略化できる。そしてギルド内の豊富なネットワークが使える、ギルドや関連商店で流通している商品も割安になる。

ギルド内へ立ち入ると、無人の窓口がいくつかあって、隣にギルド直売店のような入り口があった。覗いた感じでは、よく使う日用品くらいしか置いてない。おそらく高価なのは店の奥に置いてあるのだらう。

店の中にいる女性職員は、僕と目が合うとにっこり笑った。

誘われるように店の方へ歩いて行こうとすると、ぬっと影が頭から落ちてきて、危うく

誰かどぶつかりそうになった。横合いから進路を妨害するように立ち塞がったのは、背の高いヒヨロツとした爪楊枝のような男だった。

上から人を見る仕草が、なんとも感じが悪い。周りに控える護衛が身じろぎしたのを感じて、僕はとっさに首を振って目配せを送った。感じは悪いけど、どうやらこの職員みないだしね、なにも危害を加えてくることはしないだろう。

慌てて駆け寄って来たニールに気が付いた男は、芝居じみた仕草で尻ポケットから扇子のようなものを取り出して、口元に当てた。

「ここは子供の遊び場ではないぞ。それとも、まさか盗人じゃあるまいな」

確かに今日は、白シャツに黒の膝丈のパンツ、革の編み上げショートブーツといった質素な恰好ではあったが、よくよく見れば生地は艶やかで、ブーツの革はそれなりに高価な物だとわかっただろう。ニールにしたところで、いつも変わらない恰好とはいえ、それでもきちんと洗濯された清潔な服を着ていた。

付き添いのない子供の客、ということだけで完全に舐めた対応をしているのだ。商人にあるまじき客に対する態度といい、観察眼のなさといい、こんな男がギルドの受付にいいのだろうか、思わず物言いたくなった。

「巻物ですか？ そちらになければお出ししますよ」

そんな時、先ほど微笑んでくれたお姉さんが声を掛けてきた。彼女は、相手が子供でも営業スマイルを忘れることはないようだ。どこかの爪楊枝とは雲泥の差である。

ここで見ていたのは巻物だ。何度か使いまわしが可能な良質なものが欲しい……もつとも、燃えないことが前提だけどね。

くるっと踵を返してお姉さんと対面すると、早速、欲しいものを告げて商品を出してもらった。もちろん後方では何かごちゃごちゃ言っているが、もはや彼に用はない。僕としては、ちゃんとした商品さえ手に入れることが出来れば文句はないのだ。

「ちよつとセザールさん、いい加減にしてください。こちらはお客様ですよ」
 どうやら爪楊枝の人は、セザールという名前らしい。

「この革製の五本と、装飾のあるものを十本、あと無地のものを三十本ください」
 思った以上に大量購入だったので、さすがに女性職員も驚いたような顔をしたが、すぐになつこり笑って「かしこまりました」とお辞儀をした。

「待って待て!? なにがかしこまりました、だ！ なんの悪戯だ、この坊主。ただじゃおかんどぞ、警備員を呼んで来い」

騒音に構わず「手形でいいですか？」とお姉さんに聞くと、にこやかに頷いたので、僕はさっそく母から貰ったカバンに手を突っ込んだ。

「このっ……！」

すっかり存在を無視され、思わずカッとなったセザールは、とっさに僕の腕を乱暴に掴んだ。丁度取り出そうとしていた手形が、手から離れヒラリと彼の顔を横切る。

「ん？ ……っっ!!」

当然、そこに署名されていたのは領主の名である。変な奇声と共に、まるで熱いものに触れたように手を放して、セザールは顔を赤くしたり青くしたりと忙しそうだった。

金額の書かれていない手形、それも領主のサイン付き。そんなものを持つ子供が、一体誰なのか、わざわざ問うのも愚かというものだろう。

失態と後悔に苛まれる間もなく、どこからともなく現れた護衛の男たちによって、彼がなじがらめにされてしまった。まあ、これは仕方がない。流石に手を上げたら、客商売じゃなくても不味いよね。これを機に、接客を改めてくれるといいんだけど。

一瞬の出来事に目を白黒させていた女性職員は、受け取った手形の署名を見て、すぐに納得したように頷いた。何やら言い訳をしているセザールを横目に、彼女によって商品を受け取った僕は、ニールを連れて何事もなかったようにギルドを後にした。

さて、次は冒険者ギルドだ。

実のところ、今回の外出で一番楽しみにしていた場所でもある。もし将来、独り立ちす

るなら、やはり手っ取り早いのが冒険者だろう。

危険の多い仕事だが、自分の身一つでどこでも拠点を移すことが出来るし、それなりに稼げる職業だと言えた。将来のことはまだわからないが、それでも事前にいろいろ知っておくのはいいことだろう。商業ギルドでは、変な人に絡まれて大変だったが、冒険者ギルドでは良い出会いがあると期待したい。

少し寂れた雰囲気、武骨な石造りの門をくぐると冒険者ギルドがある。

入ってすぐに酒場があり、その脇にギルドの受付が並んでいる。

商業ギルドのように、お店のようなものは見当たらなかった。昼間だからか、酒場にはほとんど人はいない。冒険者は今の時間、フィールドへ出ていることが多いのだ。

受付の窓口には、一人だけ座っていた。

僕の視線は、彼女の頭頂部に釘付けになってしまった。

「ふふ、獣人が珍しい？」

「す、すみません、失礼なことを」

受付に座る女性の頭には、とんがった耳が付いていた。なんだろう、猫？ かな。犬ではない気がする。年齢は二十代前半といったところか。

「いいのよ、王都にはわりといるんだけど、この辺で獣人は珍しいものね」

気分を害した風でもなく、にこやかに笑っている。耳がびくびくっと動いて、改めてこちらを見回して、少し首を傾げた。

「で、どうしたの？ 冒険者ギルドになにか用事があるのかな。それとも、おつかいで来たの？」

まあ確かに、子供が二人で来るところでもないかもしれない。もちろん、本当は保護者がいっぱいいるんだけどね。

ちなみに、冒険者ギルドの登録には年齢制限はないが、慣例というものはあり、十五才以下の子供は通常では所属できないことになっているらしい。

「実は、買い物に来たのですが、どこで買えばいいのか……」

「ああ、その買い取り窓口で販売もしていますよ。もつとも今は、時間的に手の空いている職員が対応してまずけど……って、私ですけどね」

そう言つて、茶目つ気たつぷりにウインクした。猫耳でにゃんこポーズとか、どこかの街の、特殊なお店でしか見れないと思つたよ。

「なにになに？ 坊ちゃんつて年上が好きなの？」

「バツ……違うよ、そんなんじゃないって」

面白い発見をした、とばかりにニールが茶化してくるのに、僕は慌てて首を振つた。本

面に白い発見をした、とばかりにニールが茶化してくるのに、僕は慌てて首を振つた。本

当に違うからね。これは萌え棒^{もわ}というか、アイドルとかに可愛いな、とか思うアレと同じだから。言つとくけど、クリフとかに余計なこと言わないでよ。

子供たちがキャツキャツやつてるように見えたのか、受付のお姉さんは微笑ましそうに見ていた。そんな生温かい目で見守らないで！

「おいおい、いつからここは学校になつたんだ？」
後方から、いきなり野太い声がした。振り向くと、そこには四人組の筋骨^{りゅうりゅう}隆々の男たちが立っている。さつきまで広く感じたギルド内が、一気に狭くなつたような気がした。

先頭に立っている男は、僕の背丈^{せたい}よりも大きな大剣^{たいけん}を肩^{かた}にかけ、傷だらけの金属製の鎧^{よろい}を身に着けていた。……まじか、テンプレ来ちゃつた？

「あら、ジユドじゃない、なによ今日は早いわね」

「まあな、思ったより簡単に片付いたからな。また買い取り頼むわ」

ジユドと呼ばれた大男は、肩に担いだ麻^{あさ}のような目の粗い袋^{ふくろ}を、持ちあげるように担ぎなおした。なんだろうクエスト帰りだろうか？ 戦利品の換金^{かんぎん}に来た様子だつた。

「了解^{りょうかい}、でもこの子たちが先ね。先客だから」

猫耳お姉さん、こつちに話を振るのやめて。

案の定、戦士っぽいお兄さんは、僕たちをギロリと睨^{にら}んで「ほう」と呟^{つぶや}いた。野太い腕

が、ぬうつとこちらに伸ばされた。思わず身構えたが、厳ついその顔は、一瞬でにんまりと笑顔に変わって何度もうなずいた。

「おう、なんだそうか」

岩のようなごつい手が、ぐりぐりと僕の頭を撫でている。

あ、頭がもげる……。

「じゃあ、酒場で一杯やってるから、終わったら呼んでくれ」

そう言ってパーティは去っていった。どうやらテンプレは来なかったね、普通にいい人だった。護衛の人も動かなかったし、彼らはこの辺では割と有名な冒険者パーティのようだった。それに笑った顔は、意外と爽やかだったよ。

「なかなか肝が据わってるね、君」

すると、また違う方向から声があった。男の人の声だ。そこには、冒険者とは違う雰囲気、どちらかというと貴族の優男といった印象の青年が立っていた。

「サブマスター、お帰りなさい。ギルマス、さつきから待ってますよ」

猫耳の窓口嬢のおかげで、彼がこのギルドのサブマスターだということがわかった。彼女の伝言を了解して、この場を立ち去ろうとした彼は、ふと思いついたようにこちらを振り向き、僕にも笑顔で会釈した。

「こちらも軽く会釈して、窓口の彼女の方へ戻ることにした。」

「君……? すまない、ちょっと失礼」

すると、今しがた立ち去ろうとしていた彼が、すぐそこまで駆け寄ってきた。

「え? な、なに」

目を合わせると、青年はますます顔を近づけてきた。思わず仰け反るように顔を背けたが、強引にガシッと頬を挟み込まれ、穴が開くほどジッと凝視された。

ええ、なんなの!? いくらイケメンでも、男のアップはいらないデス。

「……ぶしつけな真似をして、申し訳ありません」

ざわっと、周囲の警戒が動いたのを感じたのか、青年はすっと身体を離すと丁寧に頭を下げて謝罪した。けれど、その視線はこちらに固定されたまま動かない。すぐに口を開こうとして、わずかに躊躇して何かを考えている様子だったが、ようやく小さく頷いて、お願いがあります、と切り出した。

「すみませんが、ギルマスに会って頂けますか?」

応接間のような部屋の、ふかふかのソファーに沈み込むようにして、僕は一人ポツンと座っていた。その顔には、なぜこうなった? と疑問符が浮かんでいる。

ニールは別室で待つように言われ、護衛の方々もどうぞ、とか言われていた。気づいていたのね、あのサブマスター。

彼の名は、リアム・ロベール。貴族みたいだな、と思つたら本当に貴族出身だった。

そして、今は優雅な手つきでお茶など淹れてくれてたりする。

「まもなく参りますので、今しばらくお待ちください」

なんと通常にか常にニコニコしてる人だ。これはこれで、なんだか怖い。

するとノックとともに、一人の青年が入ってきた。白いフード付きのローブのようなものを着た、どちらかという細身の魔術師タイプという感じだった。

冒険者ギルドのマスターというと、イメージ的にはさつき出会ったジエドのようなマツ

チョだと勝手に想像していたけど違ったね。それとも、ここが特別なのかな。

「初めまして、私がギルドマスターのジーンです」

僕が立ち上がると、彼もフードを取っておだやかに手を伸ばしてきた。握手に応えなが

ら、つつい半ば口をあけたまま青年を見上げてしまう。

なぜならフードからこぼれた長い髪は、見事なまでの緑色の髪だったからだ。

「こんな髪の色を見るのは初めてかい？」

座るように促しながら、ジーンもソファアに腰かけた。

その瞳も、透き通るような碧である。

「……君の瞳も、私と同じ色だね」

「あ、いえ、これはよくある色で……父も同じ色です」

ジーンは、ふと人差し指を顎に当てて、静かに首を振った。

なんとというか、所作のひとつひとつがゆっくりとして印象的な人だな。男の人だとは思

うけど、もしも本当は女性なのだと言われたら信じてしまいそうだ。

「その瞳は、……エルフの色だ」

………。

……………。

はあ………、お茶が美味しい。

僕はリアムの淹れてくれたお茶を、しみじみとした表情ですすった。

「その瞳は、エルフの……」

「二回言わなくていいです！ 聞こえてました、すみません」

何のことかわからなかっただけです。

いくらなんでもそれは突拍子なさすぎるよ。僕だって、エルフのことくらいちゃんと知ってるよ。そう、貴方のような人だね。確かにウチの国は、魔力を高めるためにエルフ

の血を交えたと聞くけど、でもそのものズバリなんて人、今時はいないからね。

「エルフってあれですよね、長命で、エルフの森に棲んでいて、緑の髪と瞳で、弓とか持っていて、こう耳のとんがった……なんだか美男美女の」

「そうだね、でも基本的に森にいるのはダークエルフだし、耳がとんがっているのもそちらだよ。それにエルフの国は、普通に街があつてお城があるらしいよ」

美男美女っていうのは知りませんが、と言つて少し笑つた。

あ、初めて笑つた。

それにしても、エルフって都会っ子だったの？ 耳も普通なの？ だいたいエルフの国ってなに？ そんなの今の世界地図には載つてなかつたよ。

「……瞳がどうかつて、どういふことですか？」

「エルフと人間の、決定的な違いは瞳の光彩でね。よくみると灰色の色彩が混じつてるんだよ。太陽の下では、銀色に反射するので見る人が見ればすぐにわかるよ」

今となつては、その違いすら知らない人がほとんどだという。髪色は、ほぼ純血じゃないと特徴がでないし、現在では血が薄まって、僕のように瞳に顕著な特徴が出ることさえ稀有だという。それだけエルフが少ないということだ。彼の話によると、純血のエルフは今では両手で足りるほどしか確認されてないらしい。

それでギルドマスターはあまり表には顔を出さないのかな？ どうやらサブマスターであるリアムが、外回りやこの顔としての役割をしているようだった。

「君は知らなかつたんだね。おそらく両親の片方、もしくは両方がエルフの血脈だったのでしょう。貴方にその特徴が色濃く出たのは先祖返りか……濃い血が入つたか」

だんだん独り言のような眩きになり、考える時の癡なのか、ジーンは唇に人差し指を当てて、じつとこちらを見据えてきた。

「私たちは……三百年前に見失つた故郷への道しるべを、ようやく見つけたのでしょうか……」

それは果たして誰に向けた言葉だったのか……。

結局、僕はその答えを得ることができなかった。

出発するまでの数日間は、ひたすら錬金作業に追われていた。

商業ギルドで手に入れた巻物に、手際よく自作の魔法紙をセットしていく。錬金を何度もチャレンジして、上級と判定された魔法紙だ。皮製の最上級の巻物には、さらに会心判定の特別製をセットした。もし図書館でいい魔法陣を見つけることができれば、さっそく写しておきたいからだ。

安価な巻物のうち、数点には初級魔法陣をあらかじめ念写しておいた。

発動実験をやっている時間はなかったが、少なくともこの間みに燃えることはないだろう。不燃処理も施したし、たぶん……大丈夫のはずだ。旅の間は、何度か野宿もするだろうし、実験も兼ねて何度か発動実験をしたいと思っている。とにかく訓練あるのみ、数をこなすことが近道だろうからね。

そういえば、葉草園で魔法を発動した時に空中に展開された魔法陣。あれは何だったんだろう？ 属性持ちが詠唱する場合、魔法陣は展開しない。というか、必要がない。端から必要な呪文構築は、己の身体で完結しているからだ。また既製品の巻物の魔法陣は、設置された魔法紙の上で魔力が巡り、魔法が発動して魔法陣は消滅する。

謎は多いけれど、曲がりなりにも魔法が使えるのだからよしとしよう。あのババーンと出現する魔法陣は、なんだか中二っぽくて恥ずかしいけどね。

そうこうしている間に、王都への旅立ちの日がやってきた。

この地域には、日本のように四季がある。まだ夏は始まったばかりだが、ここ数日は涼しい日が続いている。今日も爽やかな晴天で、馬車の旅にもってこいだろう。

屋敷の前には、妹のマノンと母が見送りに出ていた。屋敷の方を見ると、次兄も怒から

手を振っている。剣術指南の師匠ランはいつものようにビシッと立っていて、僕と目が合うとまるで執事がするような深いお辞儀をした。

結局、あの何者なんだろう？ 正体知るのも、ちよつとコワいけどね。

王都へは、馬車でのんびり一週間半というところだろう。途中にいくつかの村や小さな町があり、王都への旅路の宿場町になっている。

オービニユ伯爵領は、背に魔境という国境を背負った都市である。魔境は中央が山脈になっており、そこを超えてくるのは難しいため国境とはいっても、魔境を挟んだ隣国との国交もないし、物騒な話ではあるが侵略とかの心配もない。騒動といえは、魔境から迷い込んできた高レベルモンスターが襲ってくるくらいのもんだ。そのため、王都から離れた国境近くの街にしては、オービニユ領は豊かでのんびりした土地だった。

そして、母は近くの小さな村を治める領主の末娘である。爵位は男爵だったが、収穫の時期は領主の屋敷の者も総出になって作業する程度の貧しい領だ。それでも収穫祭は村を挙げてのお祭りになり、たまたま通りかかった父が、その祭りで母と出会ったのが二人の馴れ初めだという。

正直、両親が恋愛結婚だと聞いて驚いた。貴族はだいたい政略結婚と相場が決まっているものだと思うってたからね。というか……。

馬車に乗ってしばらくすると、向かい合った父は、いきなり身の上を語り始めてしまった。なんだか急に語られた両親の甘酸っぱい馴れ初め話に、どうにもこっぴどが赤面する勢いだ。なんなの、なにが始まっちゃったの……？

オービニユ伯爵の妻、アナスタジアは四人姉妹だった。仲の良い姉妹だったが、一番上の姉だけ、母親が違った。なんでも父親がまだ王都にいる頃に、結婚を誓い合った女性がいたのだという。

彼女はコーネリアと名乗り、学生向けの魔法道具のお店をやっていたらしい。銀色の長い髪に碧の瞳がとても美しい女性だったと、アナスタジアの父、アドルフは今でもたまに思い出しては、妻の響聲を買っているらしい。

彼女との間に女の子が授かると、すぐにもアドルフはコーネリアを妻として故郷に迎える準備を始めた。しかしその最中、彼女は産まれたばかりの娘を残して、忽然と姿を消したというのだ。

——なるほど、ただの惚気というわけではなさそうだ。どうやらこれが僕の出生と関係のある話というやつだろう。

コーネリアの残した娘シャーロットは、特異な特徴を持っていた。見たこともないよう

な、珍しい緑色の髪だったのである。

アドルフの親族は、魔族の子ではないかと疑い、気味が悪いと言って、引き取るのを反対した。むしろ彼は、そんな反対を押し切って彼女を家に迎えた。

アドルフは娘として大変可愛がっていたし、のちに授かった妹たちは姉として慕っていたが、やはり親族をはじめ、屋敷での風当たりは厳しかったようだ。いつもバンダナとフードで髪を隠していた。

そういえばジーンも、今はエルフの特徴を覚えてる者が少ないって言っていた。魔族の子とかって言われちゃうのか……もともと、その魔族もほとんどいないらしいけど。だからこそ、余計に情報があやふやになっているのかもしれない。

謂れない偏見に晒される中、それがいつべんに吹き飛ぶ事件が起きた。

なんと噂を聞きつけた王室が、ぜひシャーロットを王太子の妃に欲しいと言ってきたのである。王太子は一年前に正妃を失っており、今は二の妃のみだった。つまり三人目の妃としてシャーロットは王宮に入るようになったのだ。

亡くなった正妃は第一王子、今の王太子エルマンの母である。そして第二妃のイザベラは、第二王子エドガーと王女二人を授かっている。

正妃は、有名な学園都市を持つ友好国、ドリスタン王国の王女だった。実のところイザ

ベラの方が先に婚約が決まっております、彼女は当然正妃として迎えられるものだと思います。たらしい。けれど蓋を開けてみれば、自分は第二妃という扱いだつた。

イザベラは北の僻地の小さな王国の王女だつたが、巨大な学園都市を持つ大国の姫とでは、結果は火を見るより明らかであつた。そこへもつてきて、降つてわいたような三人目の妃。正妃がいなくなつて、あわよくば自分が正妃の座につけるのではないかと期待した彼女の心中は、穏やかではなかつたに違いない。

なぜシャーロットが王家に迎えられたのか——、それはまさに彼女の容姿がすべてを物語つていた。

「エルフの血脈だつたから？」

「それも、かなり色濃く特徴を示した容姿の……だ」

この国の始祖は、エルフを妻に迎えたという記述があるらしい。だから王族には、代々エルフの血が受け継がれてきた。そのおかげで王族は、はるかに高い魔力と、わずかに長い寿命を持って、この地を盤石に治めることができた。

エルフがめつたに姿を現さなくなつて約三百年、その血は薄れていき、人間の記憶からも遠ざかつていった。エルフだけではない、獣人や魔族、その他あまたの亜人たちが、謎の事象によつて姿を消し、そして記憶の彼方へと追いやられていったのだ。

そこへもつてきて、王家が望んだシャーロットという娘の登場。なんだかブリーディングのようで気分はよくないが、貴族や王家では珍しいことでもないらしい。確かに何代も続く魔術師の家系など、そうでもしないと高い魔力を保ち続けるのは難しいだろう。とはいつてもシャーロットの場合、陛下の一目惚れもあつたようだ。噂の真偽を確認するために密偵が派遣されていたのだが、やがて報告だけでは我慢できなくなつた当時王太子だつた陛下は、数日に亘りシャーロットを覗き見ているうちに恋に落ちたそうだ。

なんかストーカーっぽいな、大丈夫か？　この王様。

——つて、あれ？　もしかしなくても、その人つて僕の……？　直後、思わず真顔になつたことは言うまでもない。

父は、ちよつとだけ苦笑して、しばらく流れゆく景色の車窓を眺めていた。

ここからが本番かな、と僕はちよつと気が重くなつた。

「お前には兄がいた、第三王子のミッシェル殿下だ」

ぼつりと、話を始める。

公式記録では母の実家への帰省中の馬車での事故死。そして本当のところは山賊に襲われての不慮の死……もつとも、これさえも事実ではないと、限られた人たちの中では周知であつた。今から八年ほど前のことである。

「暗殺……」

「そうだ、そして首謀者は」

その続きを口に出そうとした僕を、父は首を振って止めた。

「断言はできないし、証拠もない」

父は、重いため息を一つ吐いて、僕の気持ちを慮るように少しの間沈黙する。実際、いろんなことを一気に聞きすぎて、流石に頭がついてこない。思わず、胸を押さえた。

「母……いえ、シャーロット妃は？」

もちろん知らなかったわけではない。けれど、それは教科書の中にあつた知識でしかない、だから聞いてしまった。わずかな希望をにじませて。

あえて即答はせず、父は順を追って話し始めた。

どうやら陛下は、怪我の療養のために、彼女の実家にほど近い場所に離宮を用意したらしい。そこでは生まれたばかりの第四王子とともに、しばらく静かに平穏な時間を過ごしていたという。

そんな時、幼い王子の失踪未遂があつた。まだろくに歩けもしないはずの王子が、屋敷の近くの林の中で発見されたのだ。見つけ出した数人は、その時おかしな証言をしている。木々の狭間を、反射する鱗のようなものが横切っていた。落葉を踏む獣の足音がわず

かにした、などだ。そして真冬だったにもかかわらず、林の中で眠り込んでいたとされる、助け出された王子の身体はとても温かかったという。

その後、それは誘拐未遂事件だったと明らかになる。

林を抜けた先の、とある民家にかけて込んだ男が、王子を誘拐しようとしたことを白状したのだ。とても錯乱した様子で、輝く馬に突き飛ばされたのだ、あれは竜だったんだとかとにかく支離滅裂な証言をして警備隊を混乱させた。

結局、王族に対する誘拐未遂ということで犯人は王宮に送られたが、それからどうなったのかはその証言の真偽と共に今となつては知る由もない。

父は一度言葉を切つて、ここからは妻のアナスタジアから聞いたことだ、と断つてから、再び話を続けた。

この事件がきっかけとなり、シャーロットは王子を逃がす決意をした。

なぜなら、この事件を聞きつけて、陛下が王子を手元へ呼び寄せるだろうと思つたからだ。それはもちろん、我が子を案じてのことかもしれない。けれど、王宮は安全なところではない。何も知らずに腕の中で眠る可愛い我が子を、もう決して失うわけにはいかない。実家から連れて来ていた侍女数名と、知己の騎士に護衛を頼み、屋敷から王子を逃がした。シャーロットまで姿を消すとすぐに計画が明るみに出てしまうので、身を切るような

思いで我が子と別れるしかなかったという。

そして、侍女たちはシャーロットの実家へと逃げのび、事情を了解した妹のアナスタジアが、実子として嫁ぎ先の伯爵家へと隠したのだ。

この事実を知っているのは、オービニユ家兄弟の中では長兄のファビオだけだ。

もちろん王子失踪は、陛下の知るところになったが、公式には引き続き母親と共に療養中との見解を示した。世間では失踪したたの、本当は暗殺されたのだと勝手な噂も流れたが、どれも否定も肯定もされず、結局のところ遠方で療養中なのだろうと落ち着いた。

「シャーロット妃は、馬車の事故から二年後……療養先の離宮で亡くなられた」

父は、硬い声で最後にそう締めくくった。

息が苦しくなっていることに気が付き、乾いた息を必死に呑み込んだ。さつきから口は何度も開くのだが、言葉がうまく出せない。

出会うことさえ許されなかった、幼くして亡くなった兄。そして記憶にないはずの、実の母親。でもその胸に抱かれ、愛情を注がれたのだということは、話を聞いていて痛いほどに感じた。

なぜ愛する家族が引き裂かれなくてはならなかったのか。

胸の奥底にもやもやと渦巻く、初めて感じる激情に戸惑った。

たぶん、これは怒りであり、憎しみだ。

今までは、ほんやりとした輪郭しかなかった血の繋がった肉親の理不尽な最後が、はっきりとした形で記憶に刻み込まれていく。

話を終えた父は、それ以上、何も言ってくることはなかった。

この話をするにあたっては、たぶん何かしら不安はあったはずだ。今、僕が感じている怒りや憎しみ。それに吞まれてしまわないかと、幾許かの懸念はあったと思う。復讐に溺れるリスクも考えてないはずはなかった。

現に、僕は何度も命を狙われているし、実の兄と母は、凶刃に倒れている。これを許せるかと聞かれれば――、やはり即答することが出来なかった。

旅をはじめて三日目の夜。丁度いい具合に宿泊できる村にたどり着くことが出来ず、やむなく初めての野宿となった。夜道は暗く危険な上、下手に街道から外れてしまうとモンスターに襲われるリスクもある。

岩石地帯の近く、街道脇でキャンプをすることにする。

携帯食と、持ち運びできる籠を使ってスープを作り、簡単に夕食を済ませた。この旅には、屋敷から連れてきた騎士が五人と、旅に慣れている冒険者パーティを雇って同行させ

ていた。馬車は僕達が乗る二頭立ての馬車を含めて三台である。

冒険者パーティは男女二人ずつのベテランで、先ほどからキャンプの準備や食事の後片付けをしていた。騎士たちも馬の世話などが終わると、自分たちと、主人の分のキャンプの準備を始めていた。そんな中、食事を終えた僕は、魔法の練習をしようと行って、少し離れた岩場の方へと歩いて行った。

あれ以来、父の口数は減って様子を窺うような気配を感じた。おそらく、僕の気持ちの整理がつくの待っているのだろう。正直なところありがたかった。努めて平常心を装いつつも、いつもの精神状態でないことは自分が一番よくわかっていた。

魔法の練習も、いわば通常運転に戻すための一つの手段だった。

どちらにしても巻物の実験はしたかったし。ここは景気よく、バンバンぶつ放して発散するのも悪くない。母から譲って貰ったカバンから、下級魔法が入った巻物を、ありったけ取り出した。

街道を少しだけ逸れた場所に、一つの大きな岩がそそりたっている。ビルなら三階建てくらいだろうか。これなら頑丈そうだし、多少魔法をぶつけても影響なさそう。なにしろ下級魔法だしね。

そんなことを考えていると、二人組の騎士がやって来て、岩場をぐるっと見回って物陰などを念入りに覗き込んでいた。おそらく父の言いつけだろう。街道沿いとはいえ、小物のモンスターや危険な動物が潜んでいるかも知れないからだ。軽く会釈して去っていく騎士たちに、ここで少し魔法を使うから音や光に驚かないでとだけ念押しする。

父には心配をかけていると自覚していたが、どうにもならない後悔が、いつまでも胸の中にわだかまっていた。今よりも幼い子供だった自分に、出来ることなどあるはずもなかったが、それでも、もどかしい思いだけはどうにもならない。

復讐に吞まれているわけではない……と思う。ただ、どちらにしても肉親を失う運命の星の下に生まれるんだな、と少しナーバスな気分になっただけだ。

——いや、あれ？ 今の父親は生きてる、のか。
 なんだか、ちよつと腹が立ってきた。八つ当たりに近いけれど、もとはといえば元凶はあの人だからね。

地面に置いた巻物のうち、無作為に一つを手にとった。

初級風魔法ウインドショット。うーん、衝撃波とかそんな感じかな？ 使い捨て用に作った巻物はたくさんあるし、いろいろ試してみるか。

残念だったのが、写生の為の見本集に、回復魔法が一つも載ってなかったことだ。全集のような分厚い本に、小さく参照程度の図はあったんだけど、あれは例の肩唾っばいやつ

と、同レベルだからね。まあ、王都の図書館に期待しよう。

岩場から少し離れて、巻物を開く。描かれているのは緑色の魔法陣。目前に、巨石を仰ぎ、巻物に手のひらを翳して、軽く触れながら滑らせた。あんなに苦労した魔法紙だ。ここは実験の為に、ドーンと魔力を流してみよう。

シュツ！ と、マツチを擦るときのような摩擦音がした。そして目の前に、緑色の魔法陣が展開するのと、巻物が煙を上げるのが同時だった。

「うあつっ!? 熱ちちちっ!」

手元に気を取られ、魔法が発動するのを見損ねた。ともかく魔法陣がパッと空中に飛び出したのは見えた。咄嗟に手放した巻物が、熱と煙を発して地面に転がり、真っ黒に変色してブスブスと煙を上げてくすぶつっている。

確かに燃えなかったね。……燃えなかったけどもっ!

あの苦労はなんだったんだ。だめだ、これは最初から考え直しだよ……肝心の魔法の方は、見てなかったのだからないが、とりあえず初級魔法だし、あの巨大な岩がどうこうなるものでもないだろう。何にしても、やはり魔力の調整は必要ということだ。

さて、次は少し魔力を加減して発動してみようか、とそう思った時。

ピキピキピキと、不吉な音がした。

それはだんだんと連鎖して、ふいにパキンと弾けるような音と共に、頬に小石の破片が飛んできた。つられるように、音のする方——、巨岩を仰ぎ見る。

「痛った? なに……!」

巨石の塊が、暗い視界の中でわずかに揺れた気がした。

バックナンツ! と、まるで砂糖菓子のように真ん中から岩が見事に割れた。

——え、ええええええっ! ちよっ……なにこれ。いや、嘘でしょ? 初級魔法だよ、ビビくらいは入るかもと思っただけど……って、ほんと勘弁してよお。

ゆつくりと左右に分かれたそれは、やがて砂埃を巻き上げながら倒れた。思わず父たちの方を振り向くと、全員が立ち上がってザワザワしている。数人が慌ててこちら側へと走ってきた。だよね、ごめん大丈夫だから!

すぐにそちらにジェスチャーして無事を伝えた。駆け寄ってきた騎士たちには、ちよっと魔法に失敗しただけだ、と苦しい言い訳をするしかなかった。父まで走ってくるのが見えたので、すぐ戻ることと伝言をして慌てて彼らを戻した。

「びつくりした……もう、今日のところは早仕舞いしよう!」

仕方がなく巻物を拾い集めようと、腰をかがめたその時、キャンプの方では、再び騒ぎが起こった。そちらを振り返ると、騒ぎの原因と思える砂煙が微かに見えた。

そして聞こえてきた声は、この辺りに詳しい冒険者達の注意喚起の声と、騎士たちの警戒を促す声だ。

片付けもそこそこに、僕は慌ててみんなの元へ駆けつけた。

「スプラッシュワームだ……くそ、大きいぞ」

本来、地中深く潜っているはずのモンスターが、地上に現れたというのだ。

スプラッシュワーム。とてつもない巨大なミミズ、とても言うのだろうか。乾いた砂漠地帯に出没するのに、ぬめつとした濡れた表皮が特徴で、捕食する獲物を身体から出る粘液で窒息させるといふ水系モンスターだ。

本来の住処は地中深く、地下水付近の湿った地層だと言われている。時折、獲物が動き回る日中に数回上がってくるだけで、地上の動物が寝静まる夜は、地下水が豊富な地中で眠っている、らしいのだが。

「そうか、さっきの振動……」

巨石が倒れる大きな揺れと轟音、それは地中奥深くまで響いたに違いない。

「いや、大丈夫そうだ。こつちに来る様子はない……だが、ひどく土煙が上がっていると
ころを見ると、暴れているようだな」

冒険者の一人が、望遠鏡のような長い筒状のもので現場を見ていたので、僕も目を凝ら

してそちらを注視したが、なにしろ真っ暗で何も見えない。
「……明かりが見える。馬車だ！ 騎馬もいる……戦っているのか？」
それを聞いて、僕はすぐに近くに控えてあった騎馬用の馬に飛び乗った。もしもの有事の為に、数頭はすぐに乗れるように準備してあるのだ。

「リュシアン!? なにを！」

「こちらでも戦闘準備をお願いします！ できれば他所へ誘導しますが、無理そうならこちらに合流させます」

とつさに止めに入ろうとした父を振り切り、僕は、馬の腹を足で蹴った。
考えるまでもない、あのモンスターを起こしたのは間違いない僕だ。できればみんなには迷惑を掛けたくないけれど、このまま放っておくわけにはいかなかった。スプラッシュワームは、図体はデカいが臆病なところがある。今は寝込みを起こされて興奮しているが、多勢で反撃されれば完全に目が覚めて寝床へ帰ってくるかもしれない。

慌てて飛び乗った方がいいが、荒れ地を進む馬の背で身体が安定しない。手綱をしつかり握り、なんとか操っているが、油断をすると振り落とされそうになる。

くそう、あぶみに足が届かない。何しろこの馬は、大人が乗るように馬具が調整されている。当然、短い足は届かない。

そうこうしている間に、猛スピードで走る馬車が眼前に迫って来た。

すごく大きな馬車だ。大商人か、貴族か、そんなところだろう。護衛の騎馬が、後方でワームの気を引こうと踏ん張っている。そのまま馬車をやり過ごして、後方の護衛と合流して、すぐ横を並走した。

「子供だ!? 何をしに来た、ここは危ない! 逃げろ」

「この先、南に進んでください! ワームの進路を変えます」

説明している暇はない。用件だけを叫ぶように伝えると、口で巻物のひもを解き、芯を重りにして投げるようにして広げた。

片手だとやりづらいのなんの。なんとか魔法陣に手のひらを滑らせ、発動とともに巻物を投げ捨てた。夜空に青く輝きながら魔法陣が展開して、そこから水の槍のようなものがモンスター目掛けて放たれた。一瞬、足が止まったモンスターだったが、すぐにくねくねと身体を撓ませ、再び馬車を追いかけた。

「そういや、水属性だった。ええと、ええと……」

とにかくあぶみがない分、馬の上で不安定過ぎる。馬車の護衛らしき人物は、今の魔法を見たせいか、僕を逃がすことよりも援護につくような動きに変わった。何とか馬車から目を逸らそうと、弓使いが馬上から器用にワームを狙っているが、何しろ敵はブヨンブヨ

ンした分厚い皮膚の持ち主だ。相当の強弓でもない限り、通りそうもない。

とにかく火魔法、風でもいい。何かないか……カバンに手をつ込み、ごそごそ探すが初級魔法を写した巻物が一つもない。

「なんで……あ! そうか、しまった、巻物ほとんど岩場に置きっぱなしだ。うわあ、何かあったかな。えと、コレなんだっけ……」

ええっ、一枚じゃない奴だ。ネタで仕込んだ奴! 三連魔法陣、巻物三本。ひえー、腕がもう二本欲しいよ。

ワタワタしながらも、幸か不幸か、記入済みの巻物がそれしかなかったために、三本一気に驚愕することができた。

意を決して手綱から手を放し、素早く三本の巻物を同時に開くと、滑らせるように揃えた指先で魔法陣を撫で上げた。魔力不足で不発、では洒落にならないので、ここはありったけの魔力を込めて、狙いを定めた。

暗闇に、灼熱色の緋色がほぼ一瞬で一枚目の魔法陣を描く。続いて、そこから生み出されるように二枚目、同じように三枚目が展開する。くすぶる巻物のあまりの熱さに顔を顰めたが、魔法発動までは、手放さず魔力を流し続ける。

火属性、中級魔法ファイアーランス。

単体攻撃^{こうげき}としては、その上の全体魔法よりも威力^{いりき}の高い魔法だ。夜空を明々と照らす魔法陣から、逆巻く炎^{ほのお}が一本へと収束されてゆく。ほんの数秒の出来事だが、なんだかひどくゆつくりに感じた。目の前は真っ赤で、すつと血の気が引く感覚があった。

あえて言うなら、超高層ビル^{ちやうこうそう}の高速エレベータに乗ったみたいな……ともかく酷い^{ひど}感覚だ。気持ち悪い、吐きそう、そして何より――。

めちやくちや熱い！ 足の踏ん張りやばい！ 早く、早く飛んでいけっ！

気が付くと、先ほど並走していた騎士^{きし}のお兄さんに抱きかかえられて、すでに地面に下ろされていた。どうやら魔法の発動と共に、馬から落ちそうになったところを、助けられたようである。ちよつとだけ気を失っていたのかもしれない。

父を含め、こちらの護衛隊、冒険者たちとも合流を済ませ、すつかり騒動^{そうどう}は去った後のようであった。

「……どう、なったの？」

結果として、スプラッシュワームは炎魔法の強烈な攻撃^{きやうれつ}を浴びて、横転し、しばらくのたうち回った後、そそくさと地中に逃げ出したらしい。さつきまでの熱さを思い出して手のひらを見ると、どうやら治療^{ちりやう}された後らしく火傷^{やけど}らしい損傷はなかった。

あれだ、巻物ダメだね。初級くらいなら発動時間が短いからいいけど、中級使ってみてはつきりした。それこそ、根本から考え直す必要がある。

「この度は、助けて頂いてありがとうございます」

つらつらと考えていると、ふと、頭上に影^{かげ}が落ちた。

顔を上げると、一人の少女が頭を下げていた。どうやら今まで、父と話していたらしいが、目を覚ました僕に気が付いて、慌てて駆けてきたらしい。ちよつとだけ息を弾ませ、頬を紅潮させていた。

背は高く、大人っぽい印象だが、多分十四、五くらいだろうか。

クールビューティという言葉がぴったりりの少女だった。濡れ羽色の黒髪^{くろかみ}に、綺麗^{きれい}な群青色^{じやうせい}の大きな瞳^{ひとみ}。強気^{きやうき}そうに見える表情は、少しだけ我儘^{わがまま}そうな印象があるが、華やかな笑顔^{えがお}は、それを補って余りある愛嬌^{あいせう}がある。旅装なので、彼女の服装はごく一般的な装いではあったが、サラサラの黒髪は長く艶やかで、肌も変に焼けておらず、爪の先まで手入れが行き届いている。明らかに貴族か、大富豪のお嬢様か、そんな所だろう。

「……あら？ あなた」

「な、なにか？」

うわ、じろじろ見過ぎたかな。もしかしてオジサン目線だった？

「いえ……初めてお会いする方かしら？ なんだかどこかで」

よかった、違ったね。とはいえ、会ったかどうかという質問には正直困った。こういうってのはなんだが、八才までの記憶は割と曖昧だ。これだけ印象的な人物なのだ。どこかで会ってれば、普通は忘れないとは思うが、どうにも自信がない。

「お嬢様、お礼がお済みでしたら、そろそろ」

「……会話中なのに失礼よ、控えなさい」

執事風の老人が、いきなり横合いから現れた。彼女が視線をこちらに戻すと、老人はギリと僕を睨んだ。なんだろう？ まさか、悪い虫判定？ いやいや、八才児に警戒しすぎでしょう。あれかな、爺やっつてやつかな。すごく過保護そうだ。

「もう出発するの？ 夜は危ないよ」

「実は、日程がギリギリなのよ。でも、大丈夫よ。基本的には街道を外れずに行けば、そうそうモンスターに出会うことはないわ」

「あ、今回のことは……本当にすみません」

「やだ、嫌味じゃないのよ。それよりも、聞いたわよ。子供なのに、すごく強いんですってね。うちの護衛が、ひどく興奮して貴方のこと教えてくれたわ」

見たこともない、スゴイ魔法だったって！



ん？ いやいや、普通に本に載っていた魔法だよ。そう思って、あれはファイアーランスだと説明すると、彼女はしばらくボカンとして「だけど、ファイアーランスって連射はしないと思うけど？」と首を捻った。もちろん、その通り。当然、僕は頷く。

「でも、彼の話によると、不思議な円陣から次々と炎の槍が打ち出されて、物凄く驚いたって、目をキラキラさせてたわよ」

マジか！ 僕も物凄く驚いたよ。まあ、円陣っていうのはたぶん魔法陣のことだ。普通は出ないからね、魔法陣。あれかな、正規の写生用の本じゃなかったから、なんかちよつと違ったのかもしれない。そういう事にしておこう。

僕の魔法について、彼女は興味深そうにいろいろ聞いてきたが、途中から気を失っちゃってよく覚えてない、の一点張りで通すことにした。

本当にわからないのだから仕方がない。

よほど大事な約束があるのだろう、間もなく彼女たちは旅路を急ぐと言って、夜明けを待たずに出発した。そういえば、名前を聞くのを忘れた。立ち居振る舞いや護衛の数からも、間違いなく貴族のお姫さまだろう。その割には気さくで、わけ隔てない性格に思えたが、あれだね、爺やのほうがよくほど煩そうだった。今頃は、もつと自覚を持ってくださ

い、とか叱られているかもしれない。

——ちよつとだけ黒髪が懐かしかったな。

このところ街に出るので知ったことだが、日本人のような真っ黒な髪というのはあまり見ない。モンフォールで圧倒的に多いのはブラウン系の髪と瞳なのだ。ただ魔力の高い貴族は、どこかでエルフの血脈と交わっているらしく、銀髪や金髪が多く、瞳も、緑や青など、全体的に色素が薄いのが特徴である。

今回のことで、父は勝手な行動については僕を厳しく叱ったけれど、魔法に関しては何も言わなかった。今のところ口出しする気はないようだ。とはいえ、巻物の改良は急務だろう。何気なく確認するようにバッグに手をやって、あつと気が付いた。

「そういえば、巻物！ 岩場に置きっぱなしだったんだ」

「あつたあつた」

巻物はちゃんと元の場所にあった。拾い上げながら一本ずつ確認して、バッグに仕舞っていく。そして最後の一本を拾い上げたところで、微かな音が付いた。

ギチギチギチ——。

なんだ？ 耳を澄ますと、割れた岩の、その下の方から聞こえてくるようだ。

恐る恐る顔を近づけると、割れ目のギザギザしたところの一部がユラユラと曇気楼のよう揺らめいていた。なんだろう？　ますます覗き込んで顔を近づけたその時、向こう側からヒュンツと風を切るような音がした。顔を上げる暇はなかった。

次の瞬間、ゴツ！　と、額に硬いものが当たった。
「痛いっ!？」

それ以外言葉が出なかった。冗談ではなく目の前に火花が散った。押されるように仰け反って、それでもなんとか尻もちをつくの堪えたが、その足元へ、ボトツと重いものが落ちた音がした。

「……誰か、いるのか？」

ぶつかってきた物を確認しようとしたが、すぐに聞こえてきた声に引き戻された。人の声！　どこから？　きよろきよろと、慌ててあたりを見回した。

「子供……？　まさか、君が空間をこじ開けたのか？」

再び、声が聞こえてきた。信じられないことに岩から聞こえてくるように思えた。

「だ、誰？　どこにいるの、まさかこの下に？」

「いや、私のことはいい、それより……ん？　君は」

ふいに向こう側に沈黙が落ちたが、こちらが聞き返す前に再び話し始めた。

「……いや、今はそれどころじゃないな。とりあえず、そちらに飛び出していったソレについてだ」

ソレってこのゴツゴツした塊の、コレのこと？　僕は足元に転がる、大人の拳くらいの大きさに丸まったそれを見下ろした。

「詳しい説明は省くけど、それはベヒーモスだ。まだ子供ではあるが、こちらの世界では問題ないが、そちらでは膨大な魔力をひたすら食らう魔物となってしまう」

——は？　いや、それ大丈夫？

「まあ……だけど、そうだね。たぶん君の魔力量なら養えると思うよ。ああ、私には魔力を感じる力があってね」

いつの間にかその声は、なぜか親し気な雰囲気になっていた。なんだか、こちらを知っているような印象も受ける。だけど、その声に聞き覚えもないし、思い当たる人物もいない。いったい、誰？　というかつ！

ベヒーモスとか言っちゃた？　それって、あれだよね！　ほら、空想上のアレ！　混乱しすぎて、ついつい言葉が乏しくなる。

だいたいこれ生き物なの？　どうみても、ただの黒い塊に見えるんだけど。

「あの、困ります。そっちに戻すことってできないの？」

すると、ゆらゆらと揺れていた空間が、急速に渦巻くように小さくなっていくのを感じた。向こう側の声が次第に小さく、聞こえづらくなっていく。

『残念ながら、一時的……の、ベヒーモ……繋がつただけだから、……は不安定なん』

「待って……！」

状況はよくわからなかったが、なぜか離れたい気がして、必死になって声の方へと手を伸ばしていた。「さっと、また会えるよ」遠ざかっていくノイズの彼方から、なぜかそれだけがはっきりと聞こえた気がした。

そうして不思議な歪みは、唐突に消えた。

なに……一体、何が起きたの。しばらくの間、呆然と立ち尽くしてしまった。

ギチギチギチ……。

やがて、例の鳴き声？ がした。

足元を見ると、件の敵つい塊がモゾモゾと動き出していた。

そっか、こいつの声？ だったんだな。

岩っぽいゴツゴツした胴体に、短かい四つの足がきゅつと縮こまっている。甲羅にこそ入ってはいないが、なんとなく亀っぽい……あ、あれ？ なんだっけ、そんな怪獣いなかっただけ？

足が短いからか、ソレは少しおぼつかない動きで動き出した。

よくよく見るとギチギチ音がするのは、声というより歯？ 顎かな、を鳴らしているようである。なんかあれだね、恐怖映画とかの人喰い生物とか、そういう捕食者っぽい不気味系の姿かたちだね。少なくとも、愛でる系の感じではない。

ギチギチと自己主張する、黒い生き物。

僕はテントに戻って、先ほど出会ったばかりのソレを眺めていた。

一緒のテントの住人である父は、護衛の騎士たちと交替で火の番をしているので、ここには僕一人である。

「見れば見るほど、パニック映画の怪獣だね」

岩のような硬いものに覆われた身体に、蝙蝠のような薄い羽。触ったら怪我しそうなギザギザのしっぽ。そんなもって頭にはゴツイ角。全部折りたたんだ状態は、まるで岩。

あの人は、ベヒーモスとか言ってたけど、こんな感じだったっけ？

とはいえ、もちろん前世でだって現物を見たことはないわけだけど……なにしろ空想上の生物だからね。

それにしても異様なおとなしいし、さつきからぜんぜん動かないんだけど平気かな。ベヒーモスって、凶暴なイメージがあったけど。

「あ、そうだ。鑑定スキルで調べればいいのか」

初級レベルの鑑定の巻物なら、確か父が持っていたはず。いろいろな魔法道具が入った荷物の中、それはすぐわかる場所にあった。

ベヒーモス（幼生）Lv1

おとなしい性格で草食。成体になると山のような巨体になり、歩くだけで大災害規模の被害を及ぼす。自らの能力により身体を圧縮、重さを自由自在に変化出来る。

数百年前姿を消し、今では伝説上の生き物とされている。

へえー、草食でおとなしいんだ、なんか意外だ。もつとも、歩くだけで災害とか言われちゃってるけど。でも、こっちでも伝説の生物なんだね。

え、ホントに？ ……こうして今、目の当たりにしてるけど。

いつの間にすり寄ってきたのか、黒い岩の塊が、その頭頂部にある角をごりごりと擦り付けてきた。

「痛い、痛い。お前の角、なんかヤスリみたいだから痛いんだよ」

やんわりとその頭を手のひらで押し戻すと、その手のひらにもごりごり、と角を押し付けてきた。痛い……。

鑑定の続きを読み進めていくと、それらの行動の理由がわかった。

ベヒーモスにとつて角は大切な部位。それを触れさせるのは親愛の証……なるほどね、さらに頭を押し付けてくるのは、撫でてって感じかな。

うお、じよりじよりして痛い。頭もサンドペーパーみたい、手が削れる。

そのまま意識を集中させていくと、プレート状に浮かび上がった枠の中にはさらに文字がすらすらと追加される。説明ばかりだな、やっぱ初級の鑑定は能力値みたいなものは出ないのかな？ スキル・技、と項目が出てきた。

火炎放射、絶対零度、重力圧縮、反作用ボム。なお、成体で威力を発揮すると、世界が滅ぶと言わ……うん、見なかったことにしよう。そして、えっと。

魔力供給、リンク有。リュシアンに従魔。

………んん!?

いや、……えっ、なんでだよ？

魔力を吸い取られちゃうとか、そんな契約が知らないうちに締結されちゃった？

でも、少なくとも今現在、魔力を吸われてるせいでへろへろになつてるとい感じはない。さつき中級魔法を使った時は、急激な魔力の消費に血の気が引いた気がしたけど、そんな感覚は一切ないようだ。

魔力はたくさん必要だけど、少しずつ継続的に吸収しているとか、そういう感じなのだ

ろうか。うーん……悪影響がないなら、別にいいか。

そして最後の欄に、文字化けしたような不可思議な記述がある。

なんだろうと触れてみると、名前が頭に浮かんだ。もしかしてコイツの名前？

名前って、普通は僕が決めるとかいう流れじゃないの？ それでようやく従魔契約っていう感じだよな……現実はどうかってことかな。

「○▽&◇○@!」

名前っぽいそれを口にする、ベヒーモスはぶるぶると身体を震わせて一瞬で空気を孕んだようにボンツと巨大化した。

「おわっ！ な、なんだ」

あつという間に大きくなって、僕はテントの端に押し付けられた。

「待って、待って！ 小さくなって、テント壊れちゃうってば」

すると、シウルシウルとまた小さくなっていく。

ころり、と再び石ころのように足元に転がった。そして、まるで抗議するようにゴロゴロ転がって、何度も僕の足に体当たりしてきた。

な、なに？ 何が言いたいの。

ギチギチギチ、と鳴きながら短い足をバタバタしている。

もしかして、この名前を呼ぶってこと？。

「あ……そうか。これ真名ってやつだ」

そうだと、と言わんばかりにゴリゴリと角を擦りつけてくる。だから痛いってば。

なるほどね、さっきは真名を呼ばれて能力解放しそうになっちゃった、とかそういうことかな。じゃなに、本当はあんな大きいの？ 子供なのに？

そういうえば成体になると山みたいになるって書いてあったね、あれって比喩とかじゃないんだ、そっか……知りたくなかったよ。

この姿は、つまり縮んでることだね。重さも自分で自在に操るとかあったし、なんかすごいな、本当に伝説級のモンスターだ。

ともかく、普段は違う名前を呼ぶってことね。

「なんだ、結局僕がつけるんだ、名前」

うーん、名前つけるの苦手なんだよ。なにしろ動物なんて飼ったことがない。ずっと居候だったし、一人暮らしになってからは仕事の鬼だったしね。あんまり洒落た名前だと忘れそうだしなあ……モスちゃんとか？ あれ、なんか蛾みたいだな。

うんうん唸っていると、ベヒーモスは小さな羽でバタバタと飛んで、チヨコンと頭の上に乗った。その羽、飛べるんだ！

商隊の馬車や徒歩の旅人風の集団、いろいろな人たちが門の前に並んでいる。入国審査しんさつてやつかな。

すると馬車は、その人込みひとごみを避けるようにして少し小さな門の前に進んだ。不思議そうに行列の方を眺めていると、父が説明してくれた。どうやら貴族専用の門というものがあるというのだ。なんとなくズルっぽいけどね。

待ちは一組だったので、あつという間に番がきた。

当然のように入国審査に引つかかるチョビ。

ベヒーモスはこの世界においても伝説級モンスターだ。それ故に、姿かたちを知るものは少ない。むろん、この門番も例外ではなかった。

「ええと、これは岩鼠ロックマウス、かな？」

「……え!？」

思わずびっくりして、素っ頓狂したんきやうな声を上げてしまう。

「え? なにか」

「あ、いえ、そ、そう……かな？」

ロックマウスつて、あれだよな? 岩みたいにまあるい、手足の短いゴツゴツした……あれ? 似てるね。あ、似てるわ、うんいける! それで行こう。

「そう! 岩鼠。僕の従魔なんだ」

よかった、勘違いしてくれて。羽を畳んでよかったよ。たぶん、鼠には羽ないからね。貴族専用の門だからなのか、あまり根掘り葉掘り聞かれないのが救いだった。そうは言っても、主人を特定するものは身に着けないとならないらしい。

「ではこの首輪を……首、どこかな」

革のような素材で出来た首輪を手にも、門番の青年は途方に暮れた。警戒しているのか、チョビはぎゅっと身を縮ませ、首の窪みくぼみがすっかり隠れていた。

「この胴体のところでいいですか？」

僕が腹の辺りを指定すると、青年は頷いて首輪を巻き付けようと近づいた。するとチョビはがちゃん、と顎を鳴らして威嚇した。門番の兵士はびっくりして手をひっこめる。

「あ、角に触られると思ったのかな? すみません、僕がやります」

「……岩鼠つて、角あつたかな？」

兵士の不思議そうな表情は、聞こえなかったことにした。たぶん、ないです。

岩のお化けのようなベヒーモスに、ピンクの首輪……あ、胴輪かな? 滑稽な姿だが仕方がない。

体に変なものを着けられて不機嫌なのか、チョビは僕の頭の上でモゾモゾと動き続けて

いた。辛抱してね、それがないと街に入れないんだって。

「ずっと気になっていたんだが、それは岩鼠だったのか？」

父はこの旅の間中、すこし僕と距離を取っているようだった。たぶん、一人で考える時間をくれたのだろう。なので、旅の途中からずっと僕の頭にへばりついているソレについて、聞きたくても聞きそびれていたに違いない。

「たまたま機会があつて、従魔になりました。チョビです」

岩鼠についてはあえて肯定はせず、僕はそう答えた。家族に紹介する時にでも、まとめて詳しく説明しよう。父が微妙な顔をしている理由はわかつている。岩鼠は、おそらく薬草園でクリフがプチッと退治している雑魚モンスターと同等のランクである。さっきの門番も、なんでわざわざ従魔に？ という顔をした。

いいんだけどね、どうせ強さは関係ない。僕は、別にティーマーじゃないし。

頭上のチョビを撫でると、お返しと言わんばかりにゴリゴリと頭を擦りつける。

つやつやの髪に足を滑らせながらも、どうやらチョビは頭の上がとても気に入ったらしい。いつのまにかすつかり定位置になっていた。重さは一切感じないので、乗っているのを忘れそうだが、時々ずり落ちそうになるのか爪を立てるので思い出す。

きみ、爪も痛いからね……。

それにしても従魔つて、モフモフとかぶにぶにとかそういうのだと思ってたよ。甘え方もすりすりじゃなくてゴリゴリだからね、この子の場合。

商店が建ち並ぶ街並みを通り抜け、閑静な貴族街にあるオービニユ家の屋敷に、馬車は向かった。冒険者たちとはその手前で別れた。しばらくは王都で活動して、帰日も護衛を引き受けてくれるということだ。

王都の屋敷は、それほど大きなものではない。王都にくれば一ヶ月近くは泊まることになるので、一時的に宿泊するため用意されているものである。

管理人夫婦と、その娘夫婦の四人の使用人で切り盛りしている。娘夫婦は、主人であるエヴァリストやその家族が滞在していない時は、下層の宿屋で日中のみ働いていた。そのうち自分たちで宿屋を構えるのが夢らしい。

到着を知らせていたので、管理人夫婦とその娘が出迎えてくれた。

「またよろしく頼むよ、ジム」

たぶん六十才くらいだろうか、白髪まじりで真面目くさった顔の男だった。あれは怒っているわけではなく、きつと通常モードなんだだろう。隣に控える夫人は、ドレスと名乗った。対照的に優しそうなおおばちゃんといった感じで、ふくよかで親しみやすそうな女性で

ある。娘のリンゼイは二十代後半、母親によく似てすこしぼつちやりとした可愛らしい印象だった。

リンゼイの夫、リックはこの場にいなかった。どうやら父の使いで、王城へ出向いているらしい。陛下との謁見がいつになるか、その確認の為である。

ジム一家は、じつに有能だった。

旅疲れしているだろう僕達に、すぐに湯あみができるようにと、部屋に温かいお湯を桶いっぱいを用意してくれた。この屋敷には、残念ながら風呂はない。なにしろ泊まるのはほぼ父のみなので、必要ないといって作らなかつたらしい。

僕に用意されたのは、二階の日当たりがいい客間だった。父は、一階に自分の部屋があるので問題ない。ちなみに屋根裏と、二階の隅部屋は使用人たちの部屋とのことだ。

用意してくれた桶のお湯で、さっそく二週間の旅の汚れを落とすことにした。ちゃんと途中の宿でも身体くらはいは拭いたが、やはり湯で洗い流せるのは嬉しい。

この世界にも石鹼らしきものはある。わりと簡単に作れるので、錬金術が盛んなこの国ではお手の物だろう。そして僕も、自家製の物を持つてきた。薬草園で採れる花の香料を添加して作つた、泡立ちたつぷりの石鹼だ。

こつちのごわごわして泡立たない石鹼は、ちょっと我慢できなかつた。やっぱり石鹼は

アアアワでいい香りがしないとね。本当は、たつぷりのお湯でお風呂に毎日入りたい、というのが本音である。だって、元はお風呂大好き日本人だもの。

錬金術での、調合、合成を覚えてからは、ちょこちょこ日用品をいじつたり、改良したりしている。もちろん趣味の範囲ではあるが。

「そして、コレ！」

カバンからスポンジのようなものを取り出した。

ヘチマに似た植物の実で作つたものだ。硬いタワシのようなそれを柔らかくするのには苦労したよ。乾くと、それでもカチカチになっちゃうけど、水につければ柔らかいスポンジもどきになる。

桶は、二つ用意されていた。小さな身体もこんな時には便利である。浅い桶でも、そこそこお風呂のように入ることができるのだ。足からゆつくりと浸かると、チョコビは興味深そうに頭から降りてきた。スルスルと髪を伝って肩に降りようとして、案の定、つるつと滑つてお湯に落ちた。

ベヒーモスって泳げるのかな？　なんて、のんきに見てたら、すーっと静かにお湯に沈んでいった。十秒経過、三十秒経過……？　シー……ン。

「わーっ！　チョコビ!？」

「エドガー殿下！ またこのようなところで」

少年は、咄嗟に逃げようとしたが、尻もちをついた状態からでは分が悪く、すぐに捕まってしまう。衛兵とのやり取りを見ていると、こうして謁見の間へ忍び込みようとしたのは一度や二度ではなさそうだ。

エドガーというと、たしか二の妃イザベラの長男で第二王子。つい身構えそうになったが、衛兵に捕まってジタバタしてるさまは、どう見てもただの子供だ。

考えてみたらそうだ、兄である王太子にしても確か十五才くらいである。今回のこの騒ぎも、兄の行方不明の真相を父親に聞きに行くのだと訴えている。

イザベラの息子だからといって、すなわち共犯者とは限らない。これはもう本人は何にも知らないパターンに違いない。

衛兵の話では、つい先日似たような騒ぎを起こしたらしい。

学校へ行きたいと直談判したというのだ。どうやら母親が学校に行くことに反対してゐるらしい。帝王学は、学校では学べない。いやいや、王太子だって学校へ行くために城から出てるのに、何を言ってるのだろうか。しかも帝王学って、やる気まんまんすぎだろう。この王子は、母親の近くにいるのはよくないと思った。エドガー自身が願っているように、学校だろうとなんだらうと外へ出したほうがいいのかもしれない。

王子を連れ出そうとしている衛兵を止めて、僕は父の方を仰ぎ見た。意を汲んで頷いてくれたので、エドガーと一緒に謁見の間にいこうと誘った。

「えっ、いいのか？ ……ところで、お前は誰だ？」

今更それなんだね、一番最初に聞こうよ。なんだろう、天然なのかな。

オービニユ家の三男でリュシアンだと自己紹介すると、なんとエドガーはこちらのことを知っていた。どうやら王太子である兄に聞いたらしい。そういえばファビオ兄様は王太子エルマン様と友人なのだと、ちらっと聞いたことがある。あまりそのことを話題にしなかったもので、それほど親しくしているとは思わなかった。

聞いている限り、エドガーは兄の王太子を慕っているようだ。

「ところで肩に乗ってる、ソレって何？」

話している最中に、ふと視線を動かして僕の肩の上あたりを見た。

やっぱり気になっちゃうか、頭よりはマシかと思っただけだ。

さすがに陛下に会うのに、謎の物体を頭の上に乗せていくのは礼を欠くと思い、本当は部屋に置いてこようとしたのだ。ところが言い聞かせて机に置いて部屋を出ようとした瞬間、これでもかというほど体当たりされた。

腰骨が折れるかと思っただけだから、手加減してよ、もう。

もしかしてリンクの関係で離れられないのかとも思い、結局は、仕方がなくこうして連れてきた次第なのだ。興味深々のエドガーに、チヨビを手に乗せて紹介しようとした時、後方から微かな足音が聞こえてきた。

毛足の長い絨毯のせいで、かなり近づくまで気が付かなかった。神経質そうな、規則正しく絨毯を踏むそれが、すぐ真後ろで止まる。

なぜか、背中に冷たい汗が流れるのを感じた。女の人の声が、エドガーを呼ぶ。

「ここへきてはいけないと、あれほど……あら、貴方たちは」

……嘘でしょう。本当に会っちゃいけない人、来ちゃったよ。

モンフォール王国の、今となってはただ一人の妃、イザベラ。

一般的には美しい容姿と表現するのが正しいのだろう。けれど、不思議と好感は持てなかった。もしかしたら心理的な要因も働いているのかもしれないが、表情に滲み出る為人のようなものを感じたせいかもしれない。

ひどく不愉快そうな顔をしている人だと思った。不倶戴天の敵と出会ったからこういう表情をしているのか、普段からこうなのかは知らないけれど……。

思わず顔を背けた僕に、父が代わって名乗りを挙げていた。

あのまま目を合わせていたら、何を言ったかわからない。咽喉元まで出た言葉を呑み込

むのに精一杯だった。

騒めく僕の心情に影響されてか、手のひらに乗っていたチヨビは、サツと肩の上に飛び

乗り、ギチギチと小刻みに震えている。

ここにいてはいけない、直感でそう思った。

「父様、行きましょう」

「そうだな」

丁寧にあいさつをして、父は踵を返した。僕はといえば、礼儀のなっていない子供のような態度だっただろう。

「ごめんね、エドガー王子。また今度」

なんとかエドガーにだけ挨拶して、衛兵に付き添われるようにして僕たちは謁見の間の扉へと向かった。エドガーの残念そうな視線と、イザベラの刺さるような視線を背中に感じていた。

そして謁見の間では、階段状に上った高い位置にある大げさな玉座に、偉そうなおっさ……げふんっ、陛下がこちらを見下ろすようにして座っていた。

父が臣下の礼を取るのに、僕も見よう見まねでそれに倣った。その後、二人とも顔を上げて陛下と目を合わせる。

なるほど、僕と面影が重なるね。正確には、僕が陛下に似ているんだらうけれど。「ほう……そちがリユシアンか。確かに、シャーロットに生き写しだ」

シャーロットというのは本当の母で、育ての母アナスタジアの実の姉である。あれ？ ということは、育ての母のアナスタジアとは、ちゃんと血の繋がりがあってことだ。衝撃の告白が強烈すぎて、こんな今更のことによりやく気が付いた。今の家族と少しでも血の繋がりがあつては、なんだかすごく救いのような気がした。

「エヴァリストよ、聞いておるぞ。どうやらとんでもない麒麟児のようだな」

「は、恐れ入ります。我が息子ながら目を見張る成長かと」

おまごかしの陛下の言葉に、けれど父は臆面もなくそう答えた。笑顔のまま、ピクリと国王の眉が跳ね上がる。

「……不敬だぞ、余の息子じゃ」

我慢のきかない王様だよね。残念ながら、実の父親なわけだけど。当の息子を蚊帳の外へと置いて、見えない火花を散らせている父親二人だった。

「陛下」

突然口を開いた僕に、二人は驚いたように振り向いた。

まさか、本人を忘れてなかったたでしょうね？ 気を取り直すように僕は一つ咳払いをす

ると、今日ここに呼ばれた理由を聞いた。もちろん、ここに至るまでにそれなりに事の顛末を知り、今回の召喚の理由はだいたい理解しているつもりだ。

一つは僕の無事の確認、それからこれからの立ち位置、そして暗殺の犯人について、など……今までは、様々なしがらみや人脈による国交、そのほかのパワーバランスの関係もあり、犯人のあぶり出しを躊躇っていたようだが、さすがに切羽詰まった生命の危機があったとなれば、見過ごすことは出来なくなったのだろう。

「僕としても、無用に命を狙われるのは望むところではありません。そこで伺いたいのですが、僕の王位継承権はどうなっているのでしょうか？ また、それを放棄することはできますか？」

矢継ぎ早に告げる僕に、国王もエヴァリストも思わずあつけにとられた。

父は、僕が犯人に目星をつけていることも、人並み外れて大人びていることも知っていたが、それでも驚かすにはいられなかったようだ。国王にしてみれば、会って数分の、ただかか八つになる小僧なのだ。そんな子供が、己の命を狙う輩を、捕らえて罰するよりも、それまでの理不尽な仕打ちを全て飲み込み、事を円満に解決させようとしているのだから、啞然としても仕方がない。

もつとも要因の一つに、先ほど出会ったエドガーのこともあった。

母の罪を、息子が贖うことになる。彼女にしてみれば、その息子の為にしてはいるつもりなのだろうが、つきつめればやはり自分の為、エゴに他ならない。

「いや、ならん。王室にも法はある。未成年の王族は、継承権の放棄を勝手にできない。もちろん廢嫡という手もあるが、余は……」

国王は、小さくため息をついて父、エヴァリストを經由して僕の方を見た。廢嫡という言葉の意味を吟味して、僕は少しだけ躊躇った。本当の父親との関わりを、完全に断ち切ることには思わず尻込みしたので。

肉親を失ってきた今までの辛い記憶が、少しだけ悲しく疼いたからだ。

「……わかりました、では」

「余は、そちを廢嫡する気はないぞ」

かぶせるようにして、国王はピシヤリと言いつつ放った。続けて、口を開く。

「明確な証拠が出てこなかったゆえ二の足を踏んで来たが、こうなれば犯人を明確にするのも吝かではない。余は、そなたを手放す気はない」

陛下なりに、今までも出来る限りの手を打ってきたのだ。何しろ遠方に住んでいる相手を守るといっては、容易ならざることである。僕にしても、そこを責めるつもりは毛頭ない。できれば、このまま放っておいてほしかったが、どうやら実際に会って、なにやら

陛下は決意を固めたような表情をしている。

いや、もうホント。構わないで欲しいだけなんだけど。

「陛下には、行方不明ではありますが王太子も、そしてエドガー殿下もおります」

言葉に詰まっている僕を、援護するように父が口を挟んだ。カチンときたのか、王様はそんな父に、的外れな反論をしてつむじを曲げた。

「だからなんじゃ！ そちとて息子が上に二人もおろうが。このうえ余の息子までも取り上げるつもりか」

いやいや、何言ってんの王様。僕は、伯爵家三男を辞めるつもりはないからね。もちろん声に出しちゃうと、ややこしいことになりそうなので黙っていた。

どちらにしても継承権を放棄したからといって、僕が生きている限り、イザベラにとっては目の上のタンコブだろう。でも、それほどの脅威ではなくなる。うまくいけば丸く収まるかとも考えたのだが、なかなか思うようにはならないものだ。

この謁見は、陛下にとって決意を実行に移すための、自分なりのケジメだったのかも知れない。すでに決断はしていたものの、やはり国益を考えるとすぐさま実行は難しかったのだろう。

なにしろ第二王子の母であるイザベラの失脚は、国や重臣たちの微妙な力関係を崩しか

ねないのだ。また貿易にも深く関わってくる。

彼女を処断するということは、それらすべてを天秤にかけるといふことなのだ。

「国を乱すのは本意ではありません」

「……事は、国の将来を担う王子の命に関わることじゃ」

今はまだその時ではないと、僕はきっぱりと首を振った。心情はともかく、イザベラが及ばず影響を思うと、まだ彼女の罪を暴く時ではないと考えたのだ。

この憎しみが薄れることはないし、彼女を許すことはないだろう。それでも冷静な頭では、そう判断したのだ。計算ずくの正解がわかるだけに、感情的な暴走を無理やり抑えているような図式である。だからもう王城には居たくないと思ってしまう。

国王である父は、なんだか思ったより我儘ではあるが、基本的には私情より国益を優先することが出来る人だ。現に、今まではそうしてきた。おそらく、かつて溺愛した妃の面影をもつ息子の登場に、いささか舞い上がっているだけだろう。

だからこそ、訴えた。エドガーの為にももう一度考えて欲しいと。

「あれは、母親が失脚すれば道連れになりかねん」

「だからこそです、陛下」

この国はむしろ好きだ。育ての父母が愛する国だし、僕にとっても生まれ故郷だ。でも

愛着はあつても、残念ながら王位を継ぐ気は微塵もない。だからこそ王太子が不明の今、なんとしてもエドガーには無事でいてもらわないと困るのだ。

ここぞとばかりに力を込めて食い下がった。

外へ出たがっている王子を、望み通り国外へと留学させられないかと。

もし何かあつても、エドガーが留学などの理由で王国にいない時なら、影響は最小限に抑えられるのでは？ と提案したのである。

「……少々利かん気ではあるが、兄を慕ういい子なのだがな」

まだ幼いからなのか、本人に王位に対する執着はまったくなく、どちらかというところ早く学園都市に行つて、いろいろ勉強したいと張り切っているようだ。

王太子である兄の影響がかなり大きそうだ。

そして国王は、思った以上に行方不明の王子に期待していたのがわかった。

「あれは頭脳明晰で、王族としても魔力量が桁外れだった。母の生まれ故郷だとて、学園都市になどやったのが間違だったのだ」

エドガーの留学を促していたのは、なにもイザベラばかりではなかった。後継者として期待していた長男の失踪は、想像していたより国王を苛んでいたようだ。

国王などといっても、結局は玉座に縛り付けられて自分では動けぬ不自由な身なのだから

う。大切な人を、その手で守れないジレンマは常にあったに違いない。

父と二人で説得し、なんとか国王を踏みとどまらせることには成功した。

落としどころとして、僕の護衛の強化と、イザベラに監視をつけるということで話がまとまったのだ。護衛の件は、断ったのだが速攻で却下された。

ある程度自衛はできるし、父母も大げさなほど護衛を付けてくれるので、と説明したのだが、その際にまた父親同士の火花が散り始めたので了解するしかなかった。

なんでいちいち張り合うかな、この二人。

国王からの護衛は、騎士ではなくいわゆる隠密のような者らしい。ゾロゾロついてくるんじゃないかって良かったよ。あれかな、忍者みたいな感じかな。

「せつかく王都まで来たのじゃ、ゆつくりと見物していくがいい」

別れ際に、陛下はそう言うってなにか願いはないかと聞いたので、僕はもちろん王立図書館での閲覧の許可が欲しいと頼んだ。

そんなことでいいのか、と拍子抜けした様子だったが快く許可証を発行してくれた。なんと王様の直筆のサインが入った特別製だ。こんなもっていつて大丈夫？

満面の笑みで手渡してくるそれを、まさか無碍に押し返すわけにもいかず、ありがたく頂戴した。王城から出ると、腕を上げて思いつきり背伸びした。

謁見の間では、腰ベルトの小さなポシエットにへばりつくようにしてしがみついていた。チヨビが、ようやく動き出してよじよじと頭に登ってきた。

王様に突っ込まれるのは面倒なので、とつさに目立たないようにとカモフラージュしていたのだ。とは言っても、すでに隠密は付いているはずなのでチヨビのことも筒抜けだろう。なんかいろいろ面倒くさい……。

父親である国王に対してちよつと酷いが、僕の印象はその一言に尽きた。

図書館には、さすがに大量の魔法陣の書籍があった。

今はもう使われていない大魔法から、なんの役に立つの？　と思うような独特のものまで様々である。

その中でも注目すべきは、エルフ達が考案した生活魔法だ。

魔法を特殊な武力として考える人間とは違い、エルフはほぼ全員が複数の属性を持っており、豊富な魔力量を誇る。だからこそ生まれた魔法が、生活魔法なのだ。

さすがにエルフが使うだけあって、この魔法がなかなか侮れない。ほとんどが複合魔法で、それこそ三種類以上の属性がないと使えないというバカげた難易度だ。便利は便利なのだが、一部の人間しか使えないのなら意味がない。

僕にしても属性に制限はないが、いちいち巻物を使用している時点で、手軽に使える手段とは言えない。やっぱり普通に火を熾したり洗濯したり、体を洗ったりした方がいいだろう。読み物としては、面白いんだけどね。

攻撃魔法は、それこそ一つのフロアーを占拠するほどの書物で埋め尽くされていた。こういうことには労力を惜しまないんだよね、困ったことに。いかに殺傷力を高めるか、いかに広範囲を殲滅できるか、そんなことにしのぎを削っている。

さて次は白魔法、回復魔法はと、あった。

攻撃魔法の横には、それに付随するように回復魔法の棚がある。これも戦争の激化により発達した魔法である。負傷した兵士を、効率よく元に戻して、戦場へと送り返すために開発、発展したものだ。過程はともかく、回復魔法は平和な時にも役に立つ魔法だ。

ペラペラと本をめくり、魔法陣のページをじっと見つめる。回復魔法は解毒、マヒ解除、解呪などの解除系と、傷の回復など多岐にわたる。

驚いたことに、欠損部位を修復する魔法もある。ただし、魔力消費が異常なほど甚大で、エルフほどの魔力量がなければ、下手をすれば魔法の行使者の命を奪いかねない。それほど代償がいるということだ。必要属性も風、水のほかに、光まである。光と闇は特別な魔法で、これと他の属性を持つ者は稀だ。そんな貴重な人材の命を脅かす魔法の存在は却

って不利益にさえなる。この書籍に閲覧制限がかかっているのが納得できた。

ここには、それらを上回るバカげた魔法もごろごろあった。何百人もの魔術師の魔力が空になるくらいのもので、大陸級のものである。魔法陣に描くと、それこそんでもない大きさと枚数になるらしい。

後の研究家が魔法陣を資料として残してはいるが、おそらく完全再現は難しかったのだろう。魔法陣に必要な呪文のみを文字に起こして延々と記している。その厚さは、まさに辞典サイズ。それが全十巻……これ、誰が読むの？

何はともあれ、図書館はとても面白かった。手軽な回復魔法もたくさんあったし、これから役に立つだろう。

翌日、僕は王都を旅立った。

もう少しゆっくりしていきなかったが、父が少し神経質になっていたりもあって、早々に領地にもどることにしたのだ。こう言っただけで、父と国王様はあまり馬が合わないみたいだね。

王都を発つて丸一日、往路でも寄ったオアシスの街へとたどり着いた。

旅は始まったばかりだが、この先はしばらく村も町もないので、野宿に備えてここでゆっくりするのがいつもの帰路の決まりらしい。

ところが、いつもは旅人でにぎわう街がどこか元気がない。

すれ違った旅の行商人に、どうやら病が流行しているらしい、早く立ち去った方が得策だと忠告を受けた。僕達は、詳細を聞くために町長の家へと急いだ。

「感染などの心配がある疫病ではないと、私は思っています」

町長は熱病で倒れたらしく、対応に出てきたのは息子のオットーだった。

熱帯地方特有の浅黒い肌、精悍な彫りの深い顔が印象的な青年だった。おそらく三十才前後だろう。部屋に入ってきた夫人が、来客たちにお茶を振る舞ってくれた。

「……塩、だね」

お茶に口をつけて顔を擧げた僕は、とっさにそう呟いた。

灰色の瞳を瞬かせたオットーは、驚いたように「その通りです」と、いささか戸惑ったように頷いた。軽く咳払いをして「確かに塩が混じっているようだ」と、父がオットーに説明を促した。

どうやら今年は雨が少なく、オアシスの水場はもちろん、雨季の時に出来る貯水池も干上がり、塩湖の方角にある井戸に水を汲みに行っていたという。往路で寄った時も、確かにそのような話を聞いた。じゃあ、あれからも雨は降ってないということだね。

「……治療、というか回復はできるけど、それじゃ解決しないよね」

「回復って、……あつ、そうか魔法が使えるのか？」

貴族だからといって、必ずしも魔法が使えるわけではない。ましてや回復魔法はそれなりに希少な魔法の部類に入るため、オットーは魔法による回復というのは念頭になかったのだろう。思わず敬語も吹き飛んだ。

「うん、でもそれは体内の毒を軽減したり、身体機能を活性化して治療を助けるといった一時的なものなんだ。怪我なんかと違って、治せばいいというわけじゃないからね。今回の場合、原因を何とかしないと元の木阿弥だし」

治療イコール解決と、魔法に飛びつきそうになったオットーは、思わず己の短絡思考に恥じ入る様子だった。いや、でも気持ちちはわかるよ。魔法って万能って感じるもんね。

「ここって、燃料は豊富にある？」

僕の問いかけに、なんで燃料？ とオットーはますますわからない顔をしたが、次の瞬間、「ああ、なるほど」と笑みを浮かべた。

「これも一時凌ぎではあるし……まあ、たぶん実践してる人も、少なからずいるとは思うんだけど、もうちょっと効率よくできると思うんだ」

目の前には、鉄くずの数々がうずたかく積み上げられた。

オットーの助けを借りて、住民から不要な金属を集めてもらったのだ。

これを錬金するわけだけど、なにしろ旅の途中なので設備がない。せめてこれらを塊にできれば錬金もやりやすいんだけど……あつ、そうだ！

「チヨビって、重力系の魔法持ってるよね？ 圧縮とかできる？」
ダメもとで、というか半分以上は冗談で、そんな提案をした。

すると、頭の上でチヨビが「わかった」と言わんばかりにぴよんと跳ねて、ギチギチギチと独り言のように顎を鳴らし、体をゆすり始めた。やがて目の前には、半透明の球体のようなものが現れ、何が起こっているのか考えるより早く、大きなシャボン玉は積み上げられたガラクタを包み、あつという間にキュツ！ と収縮した。

ゴトリ、と金属の塊が地面に落ちる。

「……………」

自分で頼んでおいてあれだけど……怖つ！

「……それ、岩鼠じゃないんだ」

あ、そういえばオットーがいたんだ。まあいいや、少なくともベヒーモスとは思わないだろう。僕は曖昧に笑って、そのまま鍛冶屋に案内してもらった。

要は、水蒸気を集める特殊な鋼を作ってもらおうという計画だ。

鍛冶屋には武器や防具などを専門に作る職人と、生活用品のみ扱う職人がいた。もちろん、両方担う人もいるが、大体は拘りがある者が多いので分業しているようだ。

「坊主がやったのか？ 良い錬金だ、扱いやすい」

例のインゴットを、今しがた錬金して不純物を取り除き、鍋として加工しやすいようにしたのだ。金属加工はあまりしたことはなかったが、うまくいって良かった。

彼は、生活用品専門で鍛冶をしている職人だ。さすがに手馴れていて、板状に伸ばした金属がみるみる鍋の形になっていく。僕は鍛冶はできないけれど、形状変化の魔力錬金を使って、同じようなものを作った。形だけは同じ物が、次々量産された。

魔力での形状変化と、金属を打ったり研磨したり手間をかけて行う鍛冶との違いは、硬度や粘り、独特のしなりによる耐久性がある。そして、究極にはその美しさが挙げられるだろう。ただ、今回はモノがモノなので実用性があればいい。

鍋の構造はそんな難しい原理ではない。蓋の方に仕掛けがあつて、水蒸気が効率よく溜まるようになってるのだ。

一気に町を救うとか、そういう大掛かりなものではないが、雨が降るまで個々で凌ぐことが出来る。これなら普通の鍋の値段と変わらないので、誰でも購入できるし、何より自衛ができるのだ。仮に、町が一時的に大規模な援助を行っても、じゃあ次はどうするの？

ということになっては何にもならない。

「飲み水だけでも確保できるのは助かる、他の鍛冶職人にもお願いして、大量生産の準備をしているよ」

幸い燃料だけは不足してないので、蒸気で真水を作るのは容易なことだった。

オットーは学校にも行っておりそれなりの知識もあつたので、おそらく塩が原因だろうことも、その解決策も気が付いてはいたらしい。

ただ、巨大なる過システムの家だとか、太陽熱による地中の水分を蒸発させる装置だとかを発案しては、すぐに頓挫したというのだ。なにしろ費用が莫大だった。

確かにこの土地は、豊富な塩と、蜜サボテンの産業で裕福だ。彼のように留学している者はさすがに少ないが、王都に近いこともあつて、王立の初等科へ行っている者もいるらしい。それでも、すぐにそれらを設置するだけの経済力はなかったのだ。

この先、町を挙げての大掛かりな装置を作るかどうかは、その技術をどうするかを含め、相談して決めていけばいいだろう。

その後、重篤な病人の家を数軒まわり、王都で覚えたばかりの回復魔法を使って治療を施した。その際、僕は思い切つて巻物本体から魔法紙だけを剥がしてみた。

本来、魔法陣を保護する役割の巻物だが、僕の場合はどうせ燃やしてしまうし、念写の

良いところは、そらで、しかも即座に描けることなので、魔法陣を設置する魔法紙のみで発動させてみたのだ。当然ながら煙を上げて燃えたが、魔法は問題なく発動された。時間経過による劣化防止、移動や陳列を想定した形状維持の役割は、僕には必要ない。もちろん巻物の役割はそれだけではないので改良は必要だろう。このことは、後に作製する新巻物への第一歩になった。

これ以降は、真水を飲んでいれば症状も軽くなるだろうし、自然治癒に任せるのがいいだろう。オットーもしっかりしているし、よそ者がでしゃばることもないよね。

でも、やっぱり学校へ行つてると違うなあ。確かにオットーは空回りだったけど、そのうち僕が思いついたことくらいは、やっただろうし……。

僕は、前世の記憶（プラス年の功）がある分、確かにちよつとだけ有利に立ち回れるけど、こちらのことはほとんど知らない。それこそ魔法や魔道具、こっちの特有の植物など、勉強すれば錬金だつてもっと幅が広がると思った。

フアビオ兄様も留学している国、ドリストン。

有名な学園都市がある国。我が国の友好国で、王太子エルマン様の母の故郷だ。

どんなところだろうか？ むくむくと抑えきれない好奇心が、際限なく膨らんでいくのをどうにも止められなかった。

続きは、11月20日発売のファンタジア文庫で！

©Ruu, Ouka 2018